
IS～束が異常になったわけ～

観光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS→束が異常になつたわけ

【Zコード】

N8622V

【作者名】

観光

【あらすじ】

篠ノ之束は人として壊れている。

彼女の欠点を知る人が聞けば驚くかもしない。彼女が小さい時、周りに合わせるということを知つていたし、人を思いやることもできた。口調だつて周りと変わらなかつた。それどころか、年相応に恋をする少女でしかなかつた。

青年は宙へ行きたいと夢を語り、少女はそう語る青年が好きで、そんなどこにでもある何でもない風景。

それがすべての始まり。

これから語る物語は、ほんの一力

月の短いお話。

聞いても納得してくれないかも知れない。分からないかも知れない。
それでも、それでも束がどうしてこうなつてしまつたのか。それを
理解してほしい。

私は私がもつ約束のために、ここで筆を持ち、親友の大切な思い出
を語ろう。なによりそれが彼にとつての幸いになると信じて。

～ある人物の手記より～

* Arcadia様のほうでも掲載しております。

第一話（前書き）

始めに『　IS～束が異常になつたわけ～』では、題名の通り束が異常になつてしまつたわけ　　元からあんな性格ではなかつたと、私は信じ疑わない　　を作者なりに考えて、こうだつたらいいなあというものを思いついたので書いてみました。

勿論異常になる前の束のことなので、

- 1、口調が普通。
 - 2、そこまでぶつ飛んでない。
 - 3、周りを思いやれる。
- などのピースから束が構成されています。束は生まれたときから原作みたいな人間だったんだ！！　と思つ方は今すぐバック。
そして最後には束が普通から異常になつてしまつわけですから、バツドエンドです。

基本はほのぼの。だけど最初と最後はシリアルス。一応中編で、すでに最後まで書き終わっています。これから毎日投稿して皆さんのがんばり次第で、ちょこちょこ修正をして作品の完成度を上げていきたいと思つています。なので感想はなんでもOK。ダメなところでも、いいところでもどちらでもいいので。どんどん感想のほうへご指摘お願いします。

では、オリジナル要素その他に納得したうえで、

『「IS～束が異常になつたわけ～』をお楽しみいただけたら幸
いです。

第一話

～とある人物の手記より～

私の親友に、篠ノ之束という人間がいる。

彼女が生み出したISはそのあまりの技術力と有用性ゆえに瞬く間に世界中に広まった画期的なマルチフォーマル・スーシツである。それは搭乗者に絶対の安全性と、思考加速をもたらし、既存の乗り物を超える運動性能を保有している。

そのあまりにも他の技術を突き放した科学力をもつISであるが、それはもともと宇宙を目指し開拓する目的を持っていたはずだった。

しかしそれは世界中の人に認められず、軍関係の方向へと力が入れられている。核兵器が禁止された今、ISの保有数が国の戦力を決める上でも過言ではないほどに、ISはその有用性を世界に示している。

そんなISだが影響は軍のみにどまらなかつた。IS唯一の欠陥と言つてもいい点　男性が乗ることができない、つまり女性だけが世界を揺るがす兵器を運用できるという事が、世界中の男尊女卑の風潮を一変させてしまったのだ。まるでこれまでの人類の歴史をひっくり返すかのように女尊男卑の風潮が世界をとつてかわつた。元々ゆっくりとだが、歩み寄りをしていたはずの風潮がすぐに移り

変わったのは、いったいどんな皮肉なのか。

さて、そんな世界を変えた、いや、世界を変える力を持つEISを開発した本人はどうなのか。一体どんな人間なのか。それはほとんど知られていない。というよりも、誰も知ることができない。彼女が自分の情報を管理し、それを世界へ渡そうとしないのだ。

大衆が分かつてていることは一つだけ。彼女が人並み外れた天才だということだけだ。

比べることがおこがましいほどの頭脳と類まれな美貌をもつ天才。聞くだけならば神様に愛されたような人間だ。しかし、彼女は重大な欠陥をもつっていた。それは一部の国の上層部ならば当然のこととして知られている。

それは 大切な一部の人間しか認識できない。

人間が人間の輪の中で生きていくために絶対に欠かせない力をどこかへ無くしてしまった女 それが篠ノ之束だ。

だが…… それは間違いだ。

私は知っている。篠ノ之束が大切な人以外認識できなくなつたわけを。

私は見ていたのだ。篠ノ之束が壊れていつた様を。

私は後悔しているのだ。篠ノ之束が壊れしていく理由を作つてしまつたことを。

だから私はいつまでも離れないのだ。篠ノ之束がどれだけ人として終わつてしまつても。

篠ノ之束は人として壊れでいる。

それは天才だからではない。

天才だつたからではない。

彼女の欠点を知る人が聞けば驚くかもしれない。

彼女が小さい時、彼女は確かに周りに合わせるということを知つていたし、人を思いやることもできる子供だった。口調だつて周りと変わらなかつた。

それどころか、年相応に恋をする少女でしかなかつた。

だが……その恋がすべての始まりだつた。

青年は宙へ行きたいと夢を語り、少女はそう語る青年が好きで、そんなどこにでもある何でもない風景。

それがすべての始まり。

これから語る物語は、ほんの一ヶ月の短いお話。

聞いても納得してくれないかもしない。分からぬかもしない。
それでも、それでも束がどうしてこうなつてしまつたのか。それを
理解してほしい。

私は私がもつ約束のために、ここで筆を持ち、親友の大切な思い出
を語りうつ。

なによりそれが彼にとっての幸いになると信じて。

第一話 「私は普通の女の子だよ？」

夏の暑い日のことだった。

夏休みを田前に控えた小学生たちは「わいばど」の音をならすセミにも負けない声を出しながら帰路へ走っていた。熱い熱いと文句ばかり言う大学生とは違い、この暑さの中でも小学生は元気に走り回つて帰っていた。男子は石けりをしながら、女子は今時の女子高生予備軍の片鱗を見せつつ、楽しそうに下校していた。

そんな女子たちのグループの一いつ、「ある少女がいた。

「ねえねえ束ちゃん！」この前でた夏休みの宿題つてもうやった？」

少し赤みがかつた肩甲骨まで伸びた髪をかわいらしげ水色のゴムで止めた少女 篠ノ之束にクラスメイトの少女が話しかけている。

「うん。やっぱり簡単だったよ。夏休みの宿題はあと……工作で貯金箱を作れば終わりなんだ！」

「ええ！ すつ”ーー！ やっぱり束ちゃんは眞面目だよね。夏休み始まる前に宿題が終わっちゃうんだもん。私なんか今まで取ったチャレンジがたくさん溜まってるから、きっとお母さんにやりなさい！ って怒られてからやるんだろうなあ……」

そこで束の隣を歩いていた少女 織斑千冬が声をはさむ。

織斑千冬が声をはさむ。

「なら、今からやればいいじゃないか」

少しだけつりあがった瞳。初対面ではきつめの印象を受ける。が、所詮は12歳の少女。そんな表情も大人からしたらかわいいだけだった。

「やー、やつらの戻りでもやれなーからやうなー。」

「まあまあ、ちーちゃんもなんなかつこじをこいつにしないで、
もつと励ますとかしてあげようよ」

「そつはいつてものだな、束。もつと自分でしつかりしないといけないつて一おばさん（束の母）もいつていたぞ」

「おお――――――」

「……駄目だ、私はたまについていけないよ、東！」

疲れたように息を吐く千冬。そんな彼女に東は後ろから抱きつく。

「ええい！ 熱いわ！」

「もう、そんな」といつて。ほんとは「ハーフスキンシップが好きなんだよね~」

「え、千冬ちゃんって実はさびしいと死んでしまうサガギなの？」

クラスメイトの子が、一人の様子に驚く。いつもは凛としている千冬が何だかんだでうれしそうに束と戯れていたからだ。

「違ひー！ あーーもう、束ー！」

「あいあこわー」

本気で暑苦しいと思い始めた千冬の内心を正確にサンプリングしていた束が敬礼をしながら千冬から離れた。

「はあ……今日は剣道の練習があるから、私は先に行くぞ？」

「ええ、そんな！？ ちーちゃん今日はオールでカラオケに行こうって約束したよね！？」

「自分の歳を考えろ！ 私たちがオールなんてできるか！ そもそも約束だつてしてない！」

「おーるー」

クラスメイトの少女はオールの意味が分からぬのか首をかしげる。これが普通の小学生の反応だ。

「冗談だよー、がんばってね、ちーちゃん」

そうして話していると三人が分かれる場所まで来た。今日はここでお別れだ。束は二人に手を振つてバイバイと恥ずかしげもなく大き

く手を振つて別れる。一人もそんな束に笑い返しつつ手を振つた。

「……うーん。一人になっちゃったなあ。今日はどうしようか」

夕暮れの市街地に消えていく二人を消えるまで見ていた束がポツリとつぶやいた。

その表情はさつきまでとうつて変わつて冷たい氷のような表情だつた。そこに笑顔はなく、落ち込んだ様子もなく、ただ人間の顔だけがあるようにすら見える。人間の顔を切り取つて置いておいたらこんな表情になるのかもしねり。

本人に自覚はないが、その顔は見るものに不安を抱かせるようなものだった。

「うー、今日は篠ちゃんも剣道だつていつてたもんなあ。やつぱりいつくんと一緒にいたいからかなあ。これなら私も他の誰かと約束しておけばよかつたかも」

束は特に目的もない自分の予定を恨めしく思いながら、家路を歩く。今日は家に帰つても父と母はいないし、妹もいない。さつきは千冬にスキンシップがうれしいといつてはいたが、実は束の方が寂しがりやでスキンシップが好きな人間だった。こうして予定がぼっかりと空いて一人になるとどうしても、悪い方向に考えてしまうから、好きではなかつた。……他の人のことを考えていることの方が好きな束であつた。

「どうしようかなあ」

独り言をつぶやきながら帰る小学生と言ひのも少し不気味だが、特

に束は気にすることもなく歩いていた。

運動神経はあっても、体力もない束の歩く速度は遅く、他の小学生にもどんどん抜かれてしまうくらいに遅い。そんな彼女は明日のことや、夏休みの予定のことを考えながら歩いている。考えすぎて石に躓いたり階段で危ない目にあったことのある束だが、今日もまた歩いていると赤いポールに足を引っ掛けてしまった。

「うわーー！」

と同時に田元の前から声が聞こえた。

「あ、ごめんなさい！」

瞬時に状況を判断して、自分が下を向いていたのが悪かつたことと気がつくと、顔を上げながら謝っていた。

「え、いやいや、いつも不注意だったし。別にそんなに謝らなくていいよ。そっちこそ大丈夫？」

「はい、ちょっと躓いただけなん……」

当たり障りのないことを言いながら、視界を上げるとそこにいたのはなんてことはない、ただの高校生だった。一応この辺では一番偏差値の高い学校のバッヂをつけて、真ん中に一と刻まれている。高校一年生なのだろう。容姿は特に説明することもない普通。ニキビとかは無く、少し短めに切った髪の毛と額に浮かんでいる汗が特徴と言えば特徴か。束はその汗を見て、そういえば暑いなあ、と思う程度であった。

「あれ……あれ？ なんで私の名前知ってるんですか？」

「え……あれ？ なんで私の名前知ってるんですか？」

だから突然目の前の彼に自分の名前を言われた時には驚いた。もしかして最近テレビでやっているストーカーという人なんだろうか。思わず身構える。

「えっと、この前の四区の地域会のボーリング大会覚えてない？ 俺もその時いたんだけど……」

……四区のボーリング大会？

頭の中でその情報をもとにデータを検索すると、すぐに出てきた。あれは一ヶ月ほど前のことだった。地域の集まりでボーリングについて遊ぶ話が出て、その時束は千冬と一緒にいったのだった。千冬が256ピンというとんでもないスコアを出したおかげでペアを組んでいた束もかなり目立っていたのだ。同じ地区だったというだけでこの青年が束を覚えていたくらいには。とはいっても注目される側の束からしたら誰の顔も一緒だ。はつきりとした話し覚えてなかつた。束は声をかけてきたナンパさんは悪いと思うが、正直に言う。

「『めんなさい』！ ちょっと覚えてないです……」

「いや、いいよ。逆に覚えてたらびっくりしてたし。でもこれで覚えてくれたよね。今度会つたら声かけてね？」

彼も高校生だ。しかし人の心の機微に注意して言葉を出す作業はできるのか、当たり障りのない挨拶で切り抜けようとした。彼の内心ではかわいい女の子だなあ、と思う一方で、周りから見たら俺口り

「ンに見えねえ？」と震えていたので、わざとわかれたかったのが本音だ。

「分かりました。今度会つたら、私から声をかけますね」

束が言つたのも小学生にして会話を円滑に進ませる方法を知つてゐなあ、くらいにしか思わず彼はそのまま束の帰る方向とは逆へ歩いて行つた。

これが彼と束が出会い、縁を結んだ最初の日の出来事だった。特にドラマチックなことがあつたわけでもなく、ただ道をすれ違いご近所のうわべだけの挨拶をしただけ。それだけの出会いだった。

束は天才だった。

誰が言うまでもなく、彼女は自分で自分が天才だと知っていた。いや、その言葉の範疇に当てはまっているのかすら怪しいほどの才能を自分が持っていると、彼女は正確に理解していたのだ。

元々、彼女は幼稚園の時から賢かつた。普通小学生高学年になるまで直感的な思考しかできず、論理的な思考しかできないはずだが、彼女は7歳の時から論理的思考を展開していた。周りの小学生たちの道筋の立っていない会話を聞いて不思議に思いながら、彼女の成長は続く。

他のクラスメイトの話があまりにも筋道だつていなくて苛立つた時なんて数えきれないほどある。そんな中で千冬という他よりも成長が早くそれなりに束についていける存在に出会えたのは偶然か、あるいは奇跡か。

しかし彼女はクラスメイトとの面白くない苛立ちの募る会話から千冬と言う友達を得て解放されると同時に、もつひとつ的事実に直面する。それは 計算だった。

束は今まで家にパソコンがあつて、それを当たり前のように使っていた。もちろん以前親に使っているところを見られてからは、触つていると怒られるのでばれないように使っていたが、その時にネットでいろいろな知識を溜めこんでいたのだが……そこで手に入れた数学的知識がどれだけ周りと比べて異常なのかを、小学校の算数の授業を聞いて理解したのだ。

自分がどれだけ周りと違うのか、6歳の春に彼女は理解した。

もし彼女が普通の天才であれば、ここで周りを驚かせてちやほやされて終わりだつただうづ。しかし彼女は天才の中でも、異質過ぎた。スポンジが水を吸うなんてものじゃない。底なしのブラックホールに星が丸ごと飲みこまれるよう、彼女は知識を手に入れていたのだ。そして彼女はそれを正しく理解して使えてしまった。

そう、彼女の悲劇はその知識　それも数学に限らないものを使えてしまったことだろう。

彼女はネットの海にさらされた純粋な悪意の書き込みなどから人間の一面を知つてしまつた。もちろん頭の中ではこれだけではないと知つてはいても、黒い一面を知つてしまつたことは事実。彼女は自分の才能を、特異性を周囲にさらすことの危険性を知つてしまつたのだ。才能があるということがもたらす周囲の変化。その卓越した頭脳であらゆる状況をシミュレーションし、彼女は才能を隠すべきと判断したのだ。なにせ彼女は当時から周りが思いもしないような発明品の図案を頭の中に溜めこんでいたのだから。彼女が隠そうと思ひのも当然といえば当然だつた。

とはいへ、そんな考えに彼女がいたつてしまつたのにはちょうどその時才能ある人間が隣の国に拉致されてしまうという事件が背後にあつた。そのおかげで関係するそういう類の情報があふれていたといつゝことも理由の一つとしてあげられる。

そつとして束は自分の力を隠すことにした。

それがどれだけ恐ろしいことか理解できるだろづか。

六年生の十一歳にすぎない少女が自分ができることを誰にも自慢せず、それこそ親にも言わずに自分で秘密を守り続けようと決心

あるところにとの懇意な話を。

彼女は自分の力を知っているからこそ、今なお隠しているのだ。とはいえる。最近は周りとの会話も楽しくなってきたり、それなりに自分の感情の動かし方もわかつてきていた。このままいけば、きっと彼女が学校で抱える悩みは一つだけになるはずだった。しかし……そのひとつが厄介だった。

最後の一つ……それは自分の才能を見せつけてやりたいと思つ
自尊心だった。

彼女は時々強く思つてしまつ。みんなに褒めてほしい。自分がやつたことをすうじいと書いてほしい。確かに彼女は学校で一番の成績をとつてゐるから、褒めてもらつ機会には事欠かない。しかしそれは彼女の全力じゃない。それこそ六年前には覚え終わつたことで、半分寝てもできるような問題をやって褒められても、むしろ束としては苛立ちが募るだけだった。

……本当に全力でやつたことを誰かに見てほしい。

束がいつしかそう考えるのは遅いことではなかつた。だが……彼女はそれを鉄の精神で抑えきつた。そこには家族への確かな愛情があったのだ。周りからの評価が一気に変わると、そのとき大抵は家族も巻き込まれる。そうして家族に日々が入るくらいなら、と思い束は隠す方を選んだ。

彼女は天才であつて、同時に周りの人間を思いやることもできる
ごく普通の少女だったのだ。

「うへへへんっ

そんな束は今、自室で読んでいた本をパタリと閉じるとそのまま大きく伸びをした。ずっと本を読んでいたので体が固まってしまったようだ。

図書館からわざわざ借りてきた有名な経済小説に久しぶりに満足しながら、束は席をたつとランドセルからノートを取り出して、ページを何枚か切り取る。几帳面に何度も山折りと谷降りを繰り返して綺麗に切り取ると、ペラペラの白紙のノートにいくつかの絵を書きこんでいく。束は実は意外と手先が器用なので書いてある絵はうまくない。どうやら何かの図面の用だ。

「へへ

束は鼻歌交じりにそれを書きあげていく。よくよく見れば図面上に書いてある題名が、夏休みの貯金箱となつていて、彼女は貯金箱を作るために絵を描いているらしい。しかしその図面の中に明らかに場違いなモーターや、配線図が書いてあるのは少しいただけない。一体何を作るつもりなのか。

「やつたね！ できた――！」

迷うことなく図面を引き終わると、工学生もびっくりな図面が書かれていた。どうやらお金を入れるとウサギ型の貯金箱が少しピヨンピヨンと走りだし値段を読み上げる仕組みのよつだ。

「でも……これはまずいんだよね……やっぱり違うのにな」

しかし、それは間違いなく小学生が作れるものではない。一体どこに入れたグラムから値段を読み取り、設定した機械に喋らせる小学生がいるというのか。この程度の技術であれば少し騒がれるくらいだが、慎重な性格の束は自ら自重することにした。

「やっぱり私一人だと作っちゃつたなあ……今度ちーちゃんと一緒に作ろうっと」

やはり自分は一人でいるべきではない。

束はそう思った。

今だつてなんで自分がこうして我慢しなくちゃいけないのか、なんで自分がこんな風になつてしているのか、そのことでイライラとしてくる。自分で決めた方向性とはいえ、それでもこの状況に鬱屈とした気分にすらなる。束は自分の感情すら制御するが、それでもやはりその心は12年しか生きていらない小娘だ。今までのたまりにたまつたストレスをどうにかしようとして、処理できるほどの力は未だになかった。

もしこのまま束が一人でいたら……きっと彼女は誘惑に負けて常識を覆すようなとんでもないものを作り出してしまうだろう。

今現在彼女の頭の中にはそう言つた類のものがいくつもある。今までとは効率がケタ違いの発電機や、理論すら思いつかれていない空間制御装置。それらを束は戯れを作るだろ。そうなればその先を容易く予測できる。そして わかつても一人の時間がが多くなつた束は作つてしまつ。現に今も束は小学生の領分を超えたモノを

作り出せりとしたしまつた。」のままではまよい。

「ほんと、ひとつてやだなあ……」

自分からの誘惑に負けそうになる心を叱咤し、そつと束は息を吐いた。そこには疲れたような色が、少しだけ混じっていた。

束にはやう思えた。

彼女は自分の心の中に、常に一匹の化け物を飼っている。

それは束自信の心の姿なのか、それとも彼女が捕まえてしまった闇なのか、はたまた化け物自身が束を探してきたのか。それは誰にもわからないし、束自信も自分が負けなければいいと、そう思つてい

た。

しかし、たつた一人でこの化け物 オオカミと一緒にいれば、狡猾なこのオオカミに騙されていつか束は籠の鍵をあけるだろう。そうなった時、ただのウサギでしかない束は一体どうなるのか。それは後の歴史が知ってる。

（抜粋、とある人物の手記より）

第一話

どうして私なんだろ。

そう考えることがなかつたわけじゃないよ。

友達は頭のいい方がいいっていつも言つけれど、私はいつも思えなかつた。

だって、もし頭のいい方がいいなら、私は極まらずに済んだもの。

～ある科学者へのインタビューより抜粋。

やつぱり蒸し暑い夏のことだった。

やけに強い日差しが燐々と差し込み、道路から伝わる熱気がつざつ
たいほどに暑くて、遠くの景色がかすむような夏の日。束は友達と
約束したプールへと足を進めていた。

プール田和といえばそななのかもしないが、それはあくまでプー
ルに入っている間。そこに行くまでが地獄のようだ。

「プール、プール、プール！」

「はやくスライダーにのりたーーー！」

が、そんなことは子供たちの田先の楽しみの前には特に意味もない
ようだ。彼らは皆一様に楽しそうな顔をしながら水着の入ったプー
ルバックを揺らしている。

「早く束ちゃんもいーーー？」

「うんーーー早くいかないと場所取られちゃうもんねーーー」

ひときわ元氣のある小麦色の肌をしたクラスメイトが束の手を引く。
それに束はうれしそうに顔をほこほこせながら、ぴょんと飛び跳ね
てクラスメイトの後ろを追つた。

「うんうん、今日は楽しくなりそうだねーーー」

「やうだよーーー、千冬ちゃんも来ればよかつたのに。もつたいない
よねーーー」

「でも仕方ないよ。稽古つて言つてたもん。ね、束ちゃん？..」

「うん。でもちーちゃんも稽古するのが楽しくてやつてるんだから……それに今度遊ぶ約束もしたし、今日は私たちも……あ～そ～ぶ～ぞ――――――」

この前の一人の時間とはまるつきり違つて、今日はみんながいるし、プールで遊べる。束はいつもよりもずっと機嫌が良かつた。本當なら親友の千冬も一緒に連れて行きたかったけれど、しばらくは剣道の稽古があつていそがしいらしい。泣く泣く諦めて もちろん妥協案として一日束に付き合つ約束をさせた 今日はクラスメイトの仲のいい友達と来たのだ。

クラスが一緒で付き合いもそれなりにある友達ならきっと楽しめる。お母さんからもらった二千円がはいつたウサギの刺繡のある財布を握りしめたまま空に突き上げて、声を張り上げる。

「えいえい、お――――――！」

やはり束の友達だからか、テンションとノリがいい。残りの二人も手と一緒に突き上げた。それをニヤニヤしながらみて、束は再びプールへと駆けだすのだった。

「「早く早くー。」」

「もう、待つてってばー。」

市民プールは嫌だと言った一人の意見を採用してちょっと遠くにある大きめのプールに来て、すぐさま着替えた三人は日陰を取れる位置にレジャーシートを引いていた。

なかなかに知恵の回る束は準備をしてから泳ごうと言ったのだが、お子ちゃんクラスメイトたちはまず泳いでからやろうと急かす。しかし拠点の重要性を知っている束は断固拒否。まずは日陰をとるべきだと独裁者張りの演説をクラスメイトにかまして、どうにか準備をさせていた。

「できたー！ もういいよね、束ちゃん！？」

もつ待ちきれないとばかりに束に詰め寄るクラスメイトその一。少し頬を引きつらせながら、

「う、うん

とうなづくのが精いっぽいの束だつた。……内心では私、母親のポジショնにいる……？と首をかしげていたが、どうでもいいことだと思ったのか、そのまま一人についてプールへと走つていった。

「ビニから行く？」

「やつぱりこには束ねやんに決めてもらおうよー。」

「ええ！ そうだな、流れるプールは後でも行けるし……うん！」
「こにはやつぱり朝のうちにスライダーに行こつかー。」

このプールは県内でも大きい方で、スライダーに始まり流れるプールなどの基本を抑え、さらには飛び込み台と波のプールもある本格プール施設だ。なかでも全長320mのスライダーは全国でもあまりない特大のものとして有名で、ジャンブルのように入り組んだスライダーのチューブは時おり透明になつていた高所を滑るスリルがあつて評判がいい。まだ滑つたことじゃないが、束は楽しみにしていた。

「「わんせーー。」」

キャピキャピとの後どうするとか、スライダーを滑つたことがあるとか、そんな話をしながら束たちはスライダーを滑るために階段を上つていく。

まだ朝早い方だからか、並んでいる人は少ない方だ。以前束が家族で来た時には一番下の階段の入口まで人がいたのだから、大体ピークの1／20程度だろうか。そこまで集客できるこのスライダーは

そんなに面白いのだらうか。年相応に楽しみになる。

「でも昨日の人ってかつこいいけどびみょーな話しかしなかったよねえ」

「あ、わかる。歌がけつこう好みだから期待してたのに、なんかコメント下手だしおもしろくなかったよねえー、束はどう思つ?」

「うーん。あの人は微妙だけど、隣の人はかつこいいなあって思つてる」

束は一人と昨日のテレビに出てきたかつこいいタレントのトーク力のなさについて話しながら自分の番を待つ。やはり友達と話をしていると時間がたつのも早い。さっきまで前にいた男性がいつの間にか目の前にいなくなつていた。おそらくもう滑つたのだろう、そして体感時間としては短い時間で束の番が来た。二人は滑つたことがあるらしく、束に一番を譲つてくれるそうだ。すこし感謝しつつ、チューブのなかに身を躍らせる。

始めは青いチューブ。淡い光が漏れるチューブの中を独特の爽快感と共に風を切りつつ進む。それなりに気にいつっていた雰囲気だつたのだが、すぐにパッと視界が開けると蟻地獄のようなお椀の形の場所に出る。そのままのスピードで突っ込むと、蟻地獄の壁をぐるぐると回りどんどん速度が落ちて一番下まで降りていく。そして次の色のチューブへ運ばれる。初っ端からなかなかこつた仕掛けだ。束は蟻地獄のアイディアは面白いなど、頭の中にメモしつつ、次のはどんなものが出てくるか余計に期待した。

次のチューブはさつきとは変わって紅いチューブだった。太陽の光で微妙に透けて見える世界は不思議とチューブにいる閉塞感を与え

た。同時になぜか……不安になる。滑り落ちていくこのチューブがどこか変な場所につながっていたら? どこかで落ちたりしないよね? ちゃんと下まで降りられるよね?

いやな気分が束に迫る。

そんなことありえないはずなのに、嫌な想像がかきたてられて、肌がざわざわとする。

早く、早く下まで降りたい。

束がそう思った時、赤しかなかつたチューブのなかに肌色が見えた。

……なに?

そう思ったのも一瞬。束はすでに100m以上滑ってきていてそれなりに速度が出ている。その場所から動いてなさそうな、その物が視界に映つたと思った次の瞬間には、それにぶつかつっていた。

「あやあー!?

「つまつまー! なんだあー!?

訂正、物ではなく者だった。

「イッタ~~~~イ! もつ! なんでこんなところで止まってるんですか!-!」

束はぶつかつたショックで体に痛みが走るのを自覚しながら、チューブのなかで止まるという馬鹿なことをしていた人間を睨む。もし

スピードが特に出ているところだつたら怪我をしていたかもしれないのだ、束が怒るのも無理はない。

「それと……早く離れてください！」

そしてぶつかつたショックで束とアホの体がくつついたまま滑つていた。束は一応上側だが、それでも見ず知らずの人と体をくつつけている氣はしない。すぐに力を入れてアホから離れた。そしてよつやくお互に離れていくとお互に顔を見る。

「……あれ、ボーリングの人？」

「……え、束ちゃん？」

どんな奴がこんなあほなことをしたのかと、呆れつつ睨んでひどい目に合わせようとも思っていたのに、相手は知り合いだった。思わずその平凡な顔をまじまじと見る。彼もぶつかってきたのが束と知つて思考が停止する。本当なら彼の次に降りてくるのは友達であつて、一緒に滑ろうと友達が言つたからこそスライダーの途中で待つ暴挙に出たのだから。まさか他の人が、それも近所の人が滑つてくれるとは思つまい。……とはい、チューブの中にいるのだから、固まつていた一人がそこから滑りだしたのは必然だつたのだろう。偶然にも彼の上に乗りかかつていて離れようとしたとき、束は彼をまたぐようにして下側に降りていた。そのため必然的に束は背中から滑つていく形となり……

「あわわ～～～！」

まったく先が予測できないままスライダーを滑ることになる。

「ひやあああ——？」

こういった類の遊びは先が予測できてある程度身構えられることが前提で楽しめるのであって、それができないときはめちゃくちゃ怖いだけだ。事実束は右に左にと振られることに翻弄されて涙目になつていて。……一応束の運動神経は人よりもずっといい。後に全国優勝をするようなスペックの持ち主を妹に持つ束も、自分からはあまりしないけれど、運動は人以上にできるのだ。が、それでもこうして軽くパニックになつていればどうしようもない。スライダーの特徴の一つである水が多めに流れている点のせいか、体をひっくり返して前を向こうとするもうまくできない。まるで背泳ぎをするような体勢で悲鳴を上げながらどんどん加速して滑っていく。勿論周囲は、おお楽しそうだな、としか思つてくれないわけだが。

「ええ、束ちゃんー？」

そこで束をそんな体勢にしてしまった男が動き出す。なんだか束の悲鳴が本気っぽいので彼はちょっと顔を青くしながら束を追う。

まあ、実際は束が怖がっているだけで、特に怪我をすることもないのあとで笑い話になるだけだろう。しかし、激突後、後ろ向きで滑りながら本気の悲鳴を上げさせている彼からすれば、束がなにか怪我をしたんじゃないかと不安になるわけだ。彼は束に追いつくために手で加速をつけてどんどん束に追いすがる。

(ええ!? やだなんでこっちくるのー?)

しかし、束の視点から見ると、後ろ向きで怖いのに、もうじかにぶつかった男が必死の形相で加速しながら追いかけてくるようにしか見えない。どんなホラーだ。間違つても助けてくれる王子様には

見えない。

「ちよつと待つてな。今そつち行くから！」

（むしろこないで！）

束は叫ぼうとするも、かすれて声が出ない。わたわたと手をふつて来ないでアピールをするけれど、彼には余計に助けてと見えたようだ。恐るべし勘違い。

その勘違いにも気がつかないまま彼は何度もチューブを叩くように加速し、束の足を掴むとそのまま引き寄せて正しく前を向かせる。聞こえはいいが、横から見れば小学生を胸元に抱えて滑っている変態さんだった。……兄妹には、見えなくもないかもしねり。

「きやあああああーー！」

そうこうしているうちに、十分な加速の付いていた一人はチューブをものすごい勢いで滑り落ちてゴールのプールへと落ちていった。その体制は座つた体勢なので落ちるときにプールの抵抗をもろに受け顔からいつた。

「ふはあっ

ざばーんっとよくある音をならしながらプールに落ちると、それを見ていた彼の友達が駆け寄っていく。彼がグループの最後の二人のうちの一人で、ちゃんと待つてくれたらしい。彼が笑わせてくれる最後だったので、みんな口々にからかってやろうとプールの中へとぞざふぞざふと入つて 固まる。

「あ？ みんなどうしたよ」

そういつた彼の手元には一人の美少女。上で別れた時にはいなかつたはず。……すでにこの時点で詰みだつた。

彼の友達は口々に「ロリコン……」「えつ……」「短い付き合いだつたな」といいつつ彼の元から去つていいく。

「え？ あつ！ ちょっと待つてくれ！ 『』、誤解だ！」

途中で気がついた彼が必死で誤解を解こうとするも、「犯罪者はみんなそういうんだよ」と言われば返す言葉もない。というより何をいってもまともに相手が彼の言葉を聞いてくれる気がしなかつた。

思わず呆然と束の手を握つたまま、立ち尽くす。それが束の友達が下りてきてそのまま彼にぶつかるまで続いたのは、明日以降の学校での評判とかもうもろを予想したうえでのショックとかがあつたのだろう。束が見上げたとき、逆光で顔はよく見えなかつたが、滴る雫がきらりと光りを反射している……そんな気がした束であつた。

「はあ～～～」

ベンチに座りつつ周りに雰囲気に喧嘩を売るような溜息を零した彼。束はそんな彼の姿に、自業自得があるとはいえばほんの少しだけ同情してしまった。途中で止まるのはいけないとと思うが、まさかそんなちょっととしたミスで彼の今後の学校生活の方向が変わるとは、さすがの束も予測できなかつた。

詳しく聞けばあの時チユーブで待つていてるという考えを最初に出したのは彼の後ろを滑る人間だつたそうだ。まあ、本當であるならそんなことを持ちかけられても断つてほしいところだが、友達に約束を反故にされたところをみると、少し同情的な気分になつてしまつ。束の心はそんなに図太くないので、そういうつた人をみるとそれなりに何かしたくなる。例えば電車で人に椅子を譲るとか、その程度のことだが。

「あの、大丈夫ですか？」

この場合完全に束が被害者側で声をかける必要もないのだが、この

時の束は実に常識的だ。相手のこじまで心配でもある「へりこ」には。

「大丈夫大丈夫」

からからと乾いた笑みをする彼にすこし頬を引きつらせる束。内心では、この人大丈夫かな、と思っていた。

……今の状況つて、いいのかなあ？

束は考える。

今彼は自分の明日以降のロリコンと言われるであろう日々を考えてダウナーな気分になつていて「ようだが、むしろその後もこうして一緒にいる方がまずいんじゃないかな」と。もう少し経てば缶ジュークを買いに行つた束の友達も戻つてくる。そうなれば小学六年生に囲まれる高校生のできあがり。完全なロリコンじやないかと。……束はロリコンの意味を実に正しく把握していた。

「でもおんなじ日にここに来てたなんて奇遇ですね」

「本当だよね。俺も束ちゃんと会うとは思つても見なかつたよ」

「私もです。でも、いいんですか？ 友達とわかれちゃって」

「いいつて。どうせ少し経てばあいつもまた戻つてくるだろ。別に喧嘩したわけでもないしね」

そういうものなのかなと、束はどこか慄然としつつ納得した。女の子の関係を保つ方法とはまた違つた漫畫みたいな男の関係があるのだろうか、と頭のなかにメモを残しつつ、さつきのお詫びに買つても

らった缶ジュースを飲む。体重を気にする女子高生たちが好む水の喉を通る冷たさに、内心一気に飲んでしまいたい気持ちになりながら、束は口惜しそうにペットボトルから口を離した。

「お、いい飲みっぷりだね」

彼はそんな束の姿にちやちを入れる。しかし女の子にいい飲みっぷりと褒めるのはどうだろうか。このあたりに彼の「デリカシー」ってやつの無さが透けて見える。

最近になつて大きくなってきた胸に手を当てて溜息を吐くと、彼の姿をそつと観察した。

170cmとの身長と、それなりに鍛えてあるのか引き締まった体。少し短めの髪の毛をかきあげているようで髪が立つている。何処となく野獣のような印象をうけそうな髪型だが彼の優しげな瞳がその印象を外してしまつ。はつきりと言つてしまつと、そのあたりの高校を探せば一人か二人は見つかるような青年だ。具体的には誰かが中学校のアルバムを持つてくれば、あれ、こいつお前に似てない? という会話ができるくらいだ。

束はそんな彼の姿に、特に何かを考えるまでもなく、そつと目を伏せた。ちょっとだけ彼の腹筋が割れているところに目が移つてしまつた。意外と男らしい体つきをしている。

「えつと、あの、」の後はどうするんですか?」

自分の子供らしくない視線を「まかそつと声を上げた。そんな束に気がついたように彼がすまなそつに頬を搔く。

「やつだね、とつあえずはやつぱりみんなを探しに行こうかな」

束の言葉からどこかへ早く行つてほしいとでも読んだらしい彼は、束から離れるもつともらしい理由を言つた。束はそれに気がついたよつで、彼を急かしたことを申し訳なさそうに俯いた。そんな束に彼は楽しそうに笑いかける。

「まあまあ、縁があつたらまた会おうね、束ちゃん」

彼は束の頭に一瞬手を置いて撫でようとしたが、どうにか置く前に手を止めると後ろに隠して束にバイバイと手を振つた。

「はい。いつかまた縁がありましたら

束もそういうと彼はその後一度も振り返らずに流れるプールの方へと歩いていく。そして彼の姿が人ごみの中に消えていくのを見届けた束は大きく息を吐いた。やっぱり年上と一緒にいるのは疲れるよつだ。束は買い物にいった二人が早く帰つてこないかなあ、とわざわざ取った日陰の中で思つのであった。

「また今度ね、束ちゃん！」

「また行こうね！」

夕暮れ時、夏の長い日もそろそろ沈もつかという時、ある交差点で
ありふれた会話が聞こえる。女の子たちの元気な声に家に帰ろうと
しているサラリーマンたちは少しだけ笑顔になり、町をほんの少し
だけ明るくしていた。

「いいよお～、で・も・宿題が終わらなくて行けないのはヤダから
ね！？」

そんな未来になんの恐怖もない三人の女の子たちの内の一人である
束が意地悪そうな顔をして一人に言った。

「あはは～。そのときは束大先生にお手伝いを頼んじゃうかも

「うんうん。オタスケマーーーン、いつち来てーーーってお願ひし
ちゃうかも？」

一人は束の冗談を笑つてかわす 先送りにするともいう と、軽い冗談を交えつつ、後で束に泣きつけるように口約束を結ばせようとする。……きっと最終日が近くなると今日のことを話にあげて手伝わせようとしているのだろう。

「だーめ。束さんはそんなに暇じゃないのだー。」

二人のしわくを完全に把握している束は腰に手を当ててふんぞり返つて断つた。内心残念に思いつつ、その大げさなポーズにクスクスとクラスマイトが笑うと、束にも伝染したように笑いが移る。そしてひとしきり笑うと、彼らは時間が押してきているのか、その場所でバイバイと手を振つて別れた。あまり門限に厳しくない束の家と違つて、彼らの家はかなり厳しいらしい。それを破るとしばらくの間でかけさせてくれないのだそうだ。夏休みにその罰は痛い。束は人の家には大変なことがあるんだなあと人ごとのようにつぶやいた。

束は家に帰るためにゅっくりとだが歩き始める。以前のようにゆっくりとした歩み。しかしどこかふらふらとしている。束は少し張り切り過ぎたと思いつつ、ぎこちない足を動かして家に帰ろうとする。運動は嫌いではないし、苦手ではなくとも、あんまりしない束の体力は多くない。家に帰らなくては休めないと頭ではわかっていても座りたくなる。

そんな束の歩く先に都合よく公園のベンチが見えてしまった。

木でできた普通のベンチだ。雨風にさらされ小汚く見えはするものの、疲れた束には輝いて見える。家に帰った方がいいと思いつつも足はふらふらとベンチを目指し、結局トスンと音を立てて座つてしまふのであった。

「ふう～～」

と老人のような声と共に束が背もたれに体を任せた。心の隅でマツサージュアのようにもんでもくれないかなと思うが、それは望みすぎだ。束は頭の隅に公園をマツサージュアにする方法を三つ四つと考えつつ、今日は楽しかったと頬をほころばせる。

「……ちーちゃんがいればなあ。」

もっと楽しかったのに。

続く言葉を飲み込み吐き出さないようにしながら、束はそっと空を見上げた。夕暮れの紅い空の中に、かすかに星の光が見えた。いや、もしかしたら人工衛星かもしれない。

束は人口と天然の区別はつきにくいなんて、いいなとつぶやいた。

彼女は天才だ。それもはじめから人を超絶したレベルでの天才。それは人工的にできるものではなく、いわば天然の才能。星の光は天然と人工の区別はつきにくいのに、束の自然的才能は自ら隠すこと忘れればすぐさま見つかってしまう。それは強すぎる光を放つからだ。だからこそ星の海のような場所に束も行きたいと、そう思つてしまつたのだろうか。

人工物の放つ光は細く小さく、そして狭い。それは凡人としての人生のけわしさを表すかのようだ。だが天然の光はさまざまな色合いで、人を見入らせるような魅力、そして強い光を持っている。束の才能もまた同じだった。

夕日が沈みきる刹那の間。彼女は空を見上げ続ける。そんな彼女の表情は無表情に見えて、そして優しく、歳不相応に大人びて見えた。

本当に一瞬、彼女は年不相応な精神を隠さなかつた。

だからだろうか。

「こんばんわ」

空を見上げる彼女に声がかけられたのは。

「君も星が……好きなのかい？」

ひと夏の短い物語が

幕を開ける。

第一話（後書き）

感想、誤字等がありましたら感想のほうへお願ひします。

第三話

～ある人物たちの暑い夜の密会よつ～

俺はよく知らないんだ。

まあ、一応話には聞いたことはあるよ。

なんでも姉ちゃんはずつといい借りがあるんだつつか。

どんなものか？ いや、俺が聞いても教えてくれないんだ。

ただ、一生かけてでも返さなきやいけないくらい大きなやつなんだつても。

それと……束さんに関係あることらしい。

だから詳しく述べも知らないんだつてつ！

でもみんなも疑問に思つたことくらいはあるだろ？ あの束博士とどうして姉ちゃんがずっと友達でいるのかつて。

前にある雑誌でみたんだけど、束さんはあんまり友達になりたくないつて大抵の人が言うんだつて。それでも交友が続いている姉ちゃんはさすが最強の搭乗者とか。

だからや……考えた」とくらいいあるんだ。

束さんは どうかおかしい……って。

ほんとはそんなこと考えたらいけないんだと思つ。でも俺もそういう思つたことがあるんだ。

それに……なんで姉ちゃんは束さんが大変なことになつてもずっと友達でいるのか不思議なんだ。

だつてそつだる。普通ならHISに乗つて日本に落ちてへる//サイルを破壊しようなんて考えにつき合はないだろ？

姉ちゃんは教えてくれなかつたけど、その借りが、理由なんだと思う。

根拠？ ……別にないけど。なんとなく……かな。

あの人はもう覚えてもないなにかどじ、やつぱり姉ちゃんは律義なんだよな。

うん、俺もそんな姉ちゃんが好きだ。

でもや……いつも、その話をするとおはや
すつげえ悲しそうな顔をするんだ。

なんで、だらうな。

第三話

「……お兄さん？」

「そ、れっせがぶりだね。束ちゃん

消えてしまいそうなくらいの髪をみせていた束に声をかけたのは
今日、スライダーのなかで出会った彼であった。彼は束に話しかけ

るじゃのまま近くの遊具に腰を下ろした。

「で、束ちゃんも星が好きなの？」

そんな彼が繰り返すようにいった。束はその質問に少しだけ気おくれするように息をのんだが、すぐに唇をペロリと舐めると彼の目をのぞき見た。

「眺めてるのは、好きかな。やっぱ星って綺麗だし」

束は彼と視線を合わせて睨むように眉を寄せた。しかしそんな彼女の反応のどこかしらがおかしかったのだ。彼は微笑むと夕暮れの赤みが消えた真っ暗な空に視線を向ける。

「だよね。俺もそう思つ」

彼がそつと小さな声でいった。しつととした夏の空氣に似て、耳の奥にじめじめと残りそうな声だった。束は前と違う声色に引っかかりを覚えながら、わざわざまで見せていた不安定な表情を、そつと隠した。

「どうして？」

束が話を変えようと口を開く。なんとなくだが、彼が前と違うことが怖かった。

「束ちゃんはわすれちゃったかな。今日は俺も同じプールについてたんだよ？ 一応俺の家つて束ちゃん家と近いからね、それなら帰り道も同じようになるでしょ？」

誰もいない公園の中で風に揺れているブランコがキイキイと音を小さく鳴らしている。静かな公園で彼が空をみたまま言つた。束はそれもそうだと、納得しつつ、それでも不思議だつた。

「でも、どうして私に声をかけたんですか？　ここを見られるとクラスの人にもた口リコンつて言われちゃいますよ？」

束は彼があの後、クラスメイトの友達と合流して遊んでいたのを見ていた。何だかんだできつとあの後も口リコンつて言われていたのを知つていた。

「別に、この時間にここにくる奴がクラスメイトなんてことはまずないから大丈夫だろ」

「そうですか？　たまにクラスメイトには会いますよ？」

「……あー、あれだ。高校は小学校と違つて結構遠いところから通つてくる人が多いからな、そんなに外では会うことないんだよ。だから心配する必要はなし！」

「心配？　……したつもりはないんですけど」

「ふふふ。隠さなくともいいとも。お兄さんは知つている。束ちゃんが俺の社会的身分の変化を心配してくれているというのはよくわかつているさ！」

彼は大仰に手を挙げて空へと叫んだ。ちょっと危なそうな人に見えた。

「もう、それでいいです」

束は彼の性格がめんどくさそうなことを早々に語ると、それと同時に腰を上げた。が、その腰はすぐには落とす」となる。

「で、悩める天才少女はなんで星を見上げていたんだい？」

ビクッと傍目にもわかるくらいに彼女の肩が跳ねた。束は腰を持ち上げることもなく、ゆっくりと振り返った。

「私が悩んでる？」

束は彼の言葉の中に『天才』という言葉があったことに心が震えるのを自覚した。同時にどうしてそんなことを言い出したのかが気になつて仕方なかつた。束は自分の才能を周りに知られるわけにはいかないと思っていたから。

……もし知られていたら。

そんなわけはない、とわかつていても血の気が引いていった。こんな一人の人間程度に認知された程度ではどうにかなるとは思えなかつたが、それでも警戒する必要はある。彼が束の才能に気が付いているのかいなか。……冷静で緻密な思考は冗談の一つとして言ったと主張しているが、なんとなく彼女の本能と言つべき精神の深いところが、彼への警戒を怠るなど主張していた。自分が動搖していることを悟られたくなくて、言葉の羅列の中から取り抜いてもさして影響のない部分を抜き取る。

「たぶんね。俺にはそう見えたよ」

彼は律義に答えてくれたが、束は安堵の息を吐いた。どうやらあの

言葉は彼が束の天才性に気がついて言ったのではなくて、やはり「冗談の類だったと推測できたからだ。ひとり心のなかでよかつたと息を吐いた。

……まあ、誰かにバレるようなへまはしてないしね。

落ち着いてくると周りを見る余裕もしてきた。自分があの言葉に強い忌避感と言つべきものがあるらしい。

「別にただ眺めてただけです」

一瞬どうじょうかと思つていたが、彼の言葉が「冗談でた言葉出ない以上、こじこじする必要もない。束は今度こそ家に帰らうと腰を上げた。

「ナニ? 僕こなつやめしそうに見ていたよつに見えたけど」

もう一度束の肩が震えた。

「なんてこいつかさ、星の光に吸い込まれるよつな顔……したよ。なんか悩みもあるんじやない?」

その言葉が耳へと入り、鼓膜を震わせると同時に目の前が灼熱の劫火で彩られたように真つ赤に染まつた。

……知つたよつな口を……ツ!

おそらく心配して声をかけてくれた彼に危うく激情のあまり、思いつく限りの罵詈雑言を吐き出しかけた。束は必死にそれを自制しつ、表面上は何でもないよつな顔を取り繕つ。

「……そりですか？ 別に何にもないですけどね」

「ふうん」

何もかも見透かしたような顔で束を見る視線に、束は本氣で帰ってしまうのもいい案なのではないかと思つ。なんだか彼は面倒な類の人間であるらしい。

「……俺さ、けつこう星が好きでさ。いろいろ知ってるんだよ」

訂正、面倒な人間だ。

束は基本的に波風を立てないような人づきあいを心がけて、それなりに意見の会う人とは仲良くするスタンスをとっている。そんな束でも彼の言葉をすべて無視して帰ろうかと思う。といつよりも実行したくなってきた。

「例えばあの星。束さんにそつくりじゃない？」

そういうて彼が指さしたのは、南の空に浮かぶ青い星。うつすらと見える一等星くらいの星を彼は楽しそうに見ていた。

「私に？」

「そ、束ちゃんに。あれはさ、一人ぼっちの星なんだよ。ここからじゃ分からぬけど、あの星はかなり大きめの星なんだけど、意外なことに一つも衛星がないんだ。普通結構な大きさの星、それも質量も大きな星には衛星があつて一人でいることは少ない。あれは珍しくそういう孤独な星なんだよ」

「……それって私が一人ぼっちって言つてます?」

「えりだけど?」

澄ました顔で彼は言つた。束は無性にその顔に苛立ちを感じ、今度こそ帰ろうと足を動かした。

「……じゃ、私帰りますね」

「うふ、ばいばい」

そつけなく、私は機嫌が悪いとアピールをしつつ、彼に背を向けると、彼は何でもないようにならうといつぱいぱいといつ。

……なぜだらづ。今束は負けたよつた気になつてゐる。

フンッと鼻をならして、彼の横に座つた。

「あれ、帰るんじゃなかつたの?」

「もうちよつとくらゐ話を聞いてあげてもいいですよ?」

束はあくまで自分優位にするために質問をかぶせた。彼はそれに苦笑しつつ、その仕方ないなあという顔に余計にイライラするOKと小さくいった。

「そつか、でも何を話そつかな。決めてなかつたんだよ」

「どうせならわつきの宇宙の話でもしてみたらどうですか?」

「宇宙の？　いいよ。実はちゅうと宇宙のことには詳しいつもりなんだ」

彼は楽しそうな光を田に宿していった。束は不機嫌さを隠さないまま、彼の話を一応聞く体勢を作った。

「そうだね。まずはこの空がなんで暗くなるって話からしようか「知つてるのでいいです」

しかし不機嫌な束がまともに話を聞くはずがなかつた。彼が話始めた瞬間にすぐさま声をかぶせた。顎を引き、手のひらを膝の上に載せ、下から仰ぎ見るようにし、かつ田に鋭い光をやどした迫力のその姿は案に彼に言つていた。

……得意げに私に話しかけたんだから、私の知らないことを教えなさいよ、と。

彼はあくまで彼女を天才と冗談めかして言つたわけだが、もしかして、と思いつつその迫力に冷や汗を一筋流しつつ、次の話を模索した。どうせならこの妙なフレッシャーの女の子をおどろかしてやりたいと思つ気持ちがあつたのかもしれない。

「…………じゃあ、星の光は何でできるかって話を「それも知つてます」…………じゃ、じゃあ今見ている星の光はずつと「昔の光なんですね。それを辿るとずつと昔のことがわかる」…………その通りです」

僅か一分撃沈した。

彼にはまだ壁が厚かつたようだ。

彼は自分の知っている宇宙の知識　もちろん本からの受け売りだ
を総動員して束に話しかけるが、その程度の知識を束が持つて
いないわけがなかつた。この後も彼の必死の抵抗が続くも、すべて
束に知つているといわれて、最後には間違つて発言。そこから
地面を黒板に見立てた授業までされてしまった。いわゆる青空教室。
先生は口り美幼女。しかも夜の公園。特定の趣味の人は偉く興奮す
るシチュエーションだが、もちろんいたつて普通の彼はそんな危な
い性癖を持っているわけもないのに、まじめに束の授業を聞いて、
手帳にメモをしていた。

「 ところが、この計算式になるから口ケット、
といつこよりも衛星軌道上にある物体の軌道をこのバーナーで制御で
きるんだよ」

束は額をつりと迫る汗をハンカチで拭き、ふうっと満足げに息を
吐いた。

「なるほどねえ……」こじで微分積分が使われているとは……！
これからはもっと微積が好きになれそうだよ。にしてもよく束ちゃん
はこんな問題解けたね？」

「まあ束さんにかかれば、こんなちよびよいのちよいだね。伊達
に未解の問題を解くのを趣味にしてないよ！」

おお、そりやすげえ。彼が尊敬のまなざしで見ている。

そりやじゆく束がはつと気がついた。

…………しまつた―――――！ 微分積分を実際に応用して使う方
法なんて小学生にできるか――――ッ！

バンバン汗が出ている。今まで隠していた自分の才能の片鱗を近所
のお兄さんと一緒に見せてしまつとは、たすがの束も予想外だった。
言い訳をするなら……だってお兄さん聞き上手といつか、なんかい
つの間にか説明してたんだもん。

…………じゆく束にもよくわからない何かがあつたらしく。

「えつと、わ、私は遅いからもう帰るねー。」

「ん、そうだね。ごめんね、こんな遅い時間まで教えてくれて」

「ううんー、私も好きでやつただけだからー。じゃ、じゃあ、またねー。」

「あつ！ 束ちゃん、できれば明日もよろしくねべーーー！」

「え、あ、はい！」

束は焦つたように飛びあがつて、どうとつ公園の外へと走り出した。

公園の周りには民家もなく、公園から遠めの見えなくなる位置まで走つてからようやく荒い息をつく。

「はあ……はあ……」

……どうしてだらう。

束はひんやりとした夏の夜の風に頬を冷やされていくのを感じつつ、今まで自分がしてしまったことを思つていた。

……なんで自分はあんなにいろいろなことを話してしまったのか。

多分束の思う限り、そんなことをしたのは初めてだった。生まれて家族以外に初めて、いや、家族にも見せたことのない自分の一面を見せてしまった。

……どうじか?

なんでそんなことをしたのか。本当に束は不思議だった。なんで、ともう一度脳髄に考えるよう命令をしようとして、すぐに思い改めた。脳裏に彼のデリカシーの無い顔が浮かんだからだ。

……なるほど。

束は一人納得する。あの男は面倒で、敬語すら使う価値もない相手だったということだけだった。

「そつか……うんうん」

……あんまり頭もよくなさそうだし。あの青年になら別に話をしても大丈夫かな。

束は一人うんうんと、顔を縦に振る。

「……面倒な相手には適当に相手してもいいよね」

隠れた民家から顔をだして遠目に公園の方を覗き見る。彼は束がいなくなつたあとも空を眺めていた。束は見つかるかもしれない緊張感がなくなつたことに息をもう一度吐いて、よつやく家へと帰るのであった。

……もちろん、本人は絶対に首を縦に振らないだろうが、意外に抜けていいるところのある束が、明日の約束に頷いていたことを風呂に入る前に気がついて、焦つて冷たいシャワーを浴びて悲鳴を上げたのは誰にも言えない秘密だった。

少しだけ雨が降っていた。空は暗く、雲に覆われている。これじゃ星は見えないな。

束は肩を少しだけ落として右耳にあてた電話に集中する。

「……でだ、私のほづの合宿もそろそろ終わりそうなんだ。だから遊びに行かないか？」

電話の相手は声を聞くても分かる。束にとって親友といつべき少女 織斑千冬だ。

彼女は夏休みが始まつてから合宿に長野の方まで出かけていて、こじしばらく会えなかつた。自他共に認める親友である一人に、これだけの時間合わないといふのは、どうにもさびしくなる。

千冬も将来的に非常に強い女性になるとしても、この時点ではまだ幼い少女だった。

「うんうん、ちーちゃんのお誘いを束さんが断るわけがないよ！
いつがいい？ 今がいい！？」

「馬鹿もの。今は長野だ、行けるか！……そうだな。合宿が終わるのが一週間後だから、来週の水曜日にしよう。空いてるか？」

「モーマンタリーー 束さんこまつかせておいで！」

電話越しで見られているわけもないが、束はゆらゆらと自分の部屋で踊つっていた。途中からタップダンスが入るあたり、かなりのハイテンションのようだ。

「また連絡しちゃうへ連絡できないと困る。ひとつあんず少し遅いが三時に駅前こしておひる。……忘れるなよ?」

「忘れないよ! 失礼しちゃうつなあ。」

そうが、電話越しに千冬は笑う。しかし時間が近づいてくるゆうで、後ろから声がかかつていた。

「すまんな、時間みたいだ」

「ふーふー、むつといーひやんと電話をせひーー。」

かわいく年下の生意気な女の子を装つて文句を垂れる束の声に思わず笑う。

「ふふ、今日はもひ切るわ」

「はーい。ちーちやん?」

「ん?」

「あーしてねーーー!」

「はーはー、お休み束」

「おやすみーーー」

ポチっと束は電話を切った。

電話の後の寂しさには慣れないと、

束は仕方ないと頭を振つて、すぐに寝るのであつた。

きつと俺の知らない何かが束さんと姉ちゃんの間であつたんだと思う。

それは、俺が知ることはない、知る必要な無いって姉ちゃんはいふはずでさ。

……うん、ちょっと悔しいけど、姉ちゃんと東さんの問題なんだよな。

……俺はさ、別に東さんが嫌いなわけじゃないんだよ。

もうあんまり覚えてないけどさ、やっぱ俺には優しいお姉さんでさ、大切な人の一人なんだよ。

俺が一人で家にいるときによく飯作ってくれたりさ、せびしい時に一緒にしてくれたり、結構優しいところもあるんだ。

今日のあの見るとやっぱ思えないかもしね。

でも……東さん、ほんとは やさしい、いい人なんだよ。

～ある人物たちの暑い夜の密会より～

～ある天才の独白よつ～

ずっとほしかったものは手に入らないと思っていた。

うんん、私は諦めてた。

だつてやうでしょ？

私が一番大切なしているもの（家族との平穏）を捨てないと、ほしいもの（才能を隠さずにすむ世界）は手に入らないんだもん。

手に入らないもののために、今持ってるものを捨てる事は……私にはできないよ。

そり、思つてたよ。

納得していたんだよ。仕方ないって。

それしかなかつたんだ。そうやって諦めるしか方法がなかつたんだ。

でも、手が届いてしまつた。

私がほしかつたものが手に入つてしまつた。なにも失わずに。

だからこそ、私はそれを手放すことが嫌で、できなくて、許せなかつた。

第四話

珍しくそう暑くない日だった。昨日の夜に降り始めた雨がしみ込んだ地面が暖かくなることはなく、都合よく曇りなことも重なってそこまで気温が上がらない。風もつめたいため非常に過ごしやすい日だった。

さて、そんなある日のこと。『普通』の少女である束は物陰に隠れてはちらちらと覗き見る、といつ行為を繰り返して行っていた。

「………… なんだいるのぉ？」

昨日の「明日はよひしべ」の声にうなづいていた自分を何度も叱つて、結局約束を破ることに忌避感のある束は朝から公園に来ていた。束は「これで律義な性格なので約束を破ることはしたくないと思つてゐる。しかし彼に会うのは昨日のことから氣まずい。…… あくまで束が一方的にそう感じているだけで、彼は何のことか全く分からぬいだらうが。

「………… えいじよひ」

ならばどりじよひと案を考えて思いついたのが、今の現状だつた。彼は約束の時間を決めていなかつたので、『朝早くに約束を守るために公園にいつたけどいなかつたから帰つた』作戦である。これら約束を守るために公園に行つたことにもなるし、彼に会わなくてもすむ。思いついた時には自分で、やはり自分は天才だったと納得してしまつた。まさに自画自賛。

が、そんのは絵にかいたモチ。まさか彼が朝早くからこるとは思わなかつた。いたとしても昨日会つた夜からだとばかり思つていた。

「これが意識の外を突くところ」と…… ツ

予想外の行動をとられた束のテンションもなぜかうなぎ昇りだ。とどまるところを知らない。

「ほんと、どりじよひつかなあ」

一応頭の中ではこれに対する対抗策も持つてる。…… さすがに今か

らずつと待っているわけもないだろうから、時間がたつてから帰ったところを狙つて公園に行けばいい。しかしだ、一般的な善悪の感性をもつ人間が自分を待つている人を、それこそ一日中待たせることに良心の呵責を覚えないのかと言わればそうではない。一週間もすれば忘れているだろうが、それまでの心理的ストレスはなかなか来るものがある。束はそれが嫌だった。

とはいって、彼の前に出るのもできない。むしろ勇気がない。

昨日の束は初めて自分を隠さず人と話してしまった。あの千冬にですらほんの少し話した程度で、彼女の異常性と言つべき知識を誰かに伝えたことはない。だというのに……昨日のあれはまるでお酒に飲まれてしまった人間のような行動だったと反省するほどだ。

「はあ……」

地味に最近多くなってきた溜息を吐きながら、再び公園を物陰からのぞき見た。

……まだいるし。

彼はベンチに座りながらまた空を見ている。いつまで見ているんだろうか。もう束が来てから一時間は経っているのに。

といつも、ぼーっと見ていてる彼が恨めしい。

……私はこんなに悩んで大変な思いしてるのに……！

あそこまで気の抜けた雰囲気の彼にここまで惑わされている自分が憎い。

「うなつたり……ツー　お兄ちゃんが帰るまで……」
「まだねー！」

そんな彼の前に出るのはやつぱつ癪に障る。どうせなら彼が帰つてすぐ公園にこいつらも、と半ば束も意地になつてきた。

……じつして束の一方的な、実に、いやほんとに、マジで、くだらないプライド（あくまで束の）をかけた戦い（青年は戦いがあるとすら知らない）が始まつた。

「わ、わたしの負けだよ……ツー！」

束は泣きわな顔をしながら彼の前に立つていた。

「え？ え？ どうこういとだつてばよ？」

まったく覚えのない束の表情に彼は焦っている。

「まさか……こんな時間までいるなんて、さすがの束さんも予想外だつたよ……」

敗北の味を覚えた束はがっくりと肩を落とす。それもそのはず、現在時刻はPM8：00。朝のAM8：00から実に12時間もの間彼はベンチに座っていたのだ。さすがの束の彼の忍耐力の前には膝を屈するしかなかつた。……物陰に立つて待つていた束の足が限界で、文字通り膝を屈してしまつたというのが正確な話なのだが、これは天才の意地にかけて彼に悟らせなかつた。

「え、もしかしてずっと見てたの？ なんだ、もっと早く出てきてくればよかつたのに」

「いやいや、束さんももつと早くに出たかったよ。…………お兄さんが早く帰れば私も苦労しなくて済んだのに……」

「ん？ なにかいつた？」

「ううん。なにも

素知らぬ顔で彼女は言つた。彼は不思議に思いつつも彼女に昨日の話の続きをせがむ。

「わう？ でも、今日も悪いんだけど、いい……教えてください！」

取り出したのは高校生が読むには厚い本。英語で書かれたそれは束が以前読んだことのある宇宙科学についての本だった。昨日の時点で彼が宇宙に並々ならぬ熱意を感じていた束はそれがでてきたことを不思議に思わなかつたものの、彼の熱意に首をかしげた。

……年下の子供に頭を下げてまで教わりたいことなの？

しかし束は彼がなんで宇宙に興味があるかを聞くことはせず、彼が渡した本を手に取つた。

「なんだ、これか。結構前に読んだけど、これ簡単だよ」

「え、まじ？ そもそも英語が難しくていまいちコアンスが理解できないところがあるんだけど」

束はパソコンで世界中の情報や、論文を読んでいる。もちろんその中には英語で書かれているものもあつて、最初は苦労したが今では話すのも簡単なくらいにはマスター済み。彼のいうコアンスが理解できないということが、実はよくわかっていない だつて読んで文字のごとくじゃないの？ とは束本人の談。……それが周りには理解できないということを根本的にわかってくれないのは、彼女の脳細胞が人よりも数倍多いからからなのか が、とりあえず彼に説明してあげることにした。

「どう？」

「うーん」

そういうつて彼が指さしたのは、教科書にはない本土独特の表現だつ

た。日常会話で使うような微妙な表現は、向こうに行かなくては覚えてこいだろ？ もちろん高校生程度で使うような英文ではない。

束はなるほどと一つ頷いてから彼にこの英文を読んであげた。

自分は人に教えるのあまり向いてないと千尋がいつていたことから、彼にも教えるのではなく、理解してもらうように自分で努力する方向に仕向ける方針でいくらしい。実際には強いやる気のない相手には使いにくい方法だが、幸いにも彼にはやる気がある。

「ああ、そっか！ いつ訳すればいいのか？ ……あれ、でもいつと話がつながらなくね？」

「ううん。一応前のページでいちの内訳についての説明があるからそれを引用してみると……」

「なるほど、わからん」

「え、だからこりだつて」

「いや、そんな難しい単語、辞書なきや無理」

そうかな。小さく首を傾げた後に束はどの単語がわからない？ と聞いて、わからない単語の上に意味を書いていく。幸い文法は大丈夫なよつのので、これでいいだろうと彼女は思つ。

「ふむふむ、そういうことが」

「……ほんとに分かったの？」

「おひ、こえ———！」

はあ、とまた溜息を吐いた彼女は、彼のお調子者の様子にひりひりやましそうな視線を送り、そつと笑った。

「で、内容の方は大丈夫なの？」

「…………」

彼は小さく呻いて黙つた。

「……じゃ、最初のほうから簡単に説明してあげるかい」

「……よろしくお願ひします」

「というわけで、ここが円錐形なのは空気を切り裂き空気抵抗を少なくし、かつ全体の空気の流れを壊さずにできるからなんだよ……と、もう一〇〇〇だね。今日は終わりにしようか」

「うー、ありがとうございます、束先生！」

びしつと音を立てながら、右手で敬礼。背筋は伸びていい姿勢だ。思わずこっちも敬礼したくなってしまつ。すでに夜の闇も深く、暗闇を電灯が道を照らすだけだ。そろそろ束も帰らなくては見周りの警官につかまってしまう。というよりも、親が怒つてないかのほうが心配だった。一応連絡を入れたとはいえ、この時間はさすがにまずいだろ？ 束はこの後のことと思うと胃が痛い。それでもこの教師のまねごとのような時間を後悔しようとは思わない。

そんな束の気持ちを置いて、彼はベンチにもたれかかり大きく息を吐いて体の筋を伸ばした。一時間も集中して話を聞いていたために体の節節が固まっていた。そんなまったくこっちのことを見ていなさい、いわばレ

ディーの様子に気を配らない駄目な男に、束はにっこりと満面の笑顔を作ると、

「じゃ、ここまで訳して置くよ！」宿題だよ？」

と彼に囁く。そのページ数、実に100ページ近く。彼は青くなりながらもコクコクと頷いた。俺も学校あるのに……という囁きは先生役を地味に気にいつきていた束の前には意味は無い。彼は学校

の授業中に翻訳することに決めた。せめて授業で大切なテストに直結するような部分はでるなと祈りながら。

「じゃ、私もう帰るね」

「うん。ほんとにありがとな

彼は今も必死に自分が持つてきた分厚い本を見ながら、それでも束の方を向いて笑う。束はこういう人と知り合いになるのっていい経験かもと思いながら、同じく笑い返して、手を振る。そして、二人は別れた。もちろん、また明日、声をかけることはわすれなかつた。

夏の夜道で、鈴の音のような音が響く。小さな音は鈴虫の声に巻き込まれ、聞こうと思わなければ聞けないほどの大さだ。それでも確かにそこに音がある。

「へ」

そんな夜道を歩く音源は、束だ。

次々と変わる音の高さに鈴虫が合わせるような気分を一人味わいながら、彼女は踊るように家に帰っていた。小さな唇から洩れる音は飛んだり跳ねたり、とても楽しそうだ。

「へへ」

彼女自身もまた、少しだけ歩調が軽い。まるで踊るよつだ。「つい水色のワンピースがやらやらと揺らめく。

「へへへ」

彼女がこんなに機嫌がいいのは久しぶりだった、本人に覚えないほどに。

くるっと彼女がターン。広げた両手が空気を揺らし、そつと風が吹いた。

また明日。

「ふふふ」

彼女は小さく微笑んで笑った。

さつきの彼の顔は面白かった。青くするという表現がぴったりな彼の驚きよう……どうにも笑みがこみ上げてくる。

まさか、まさか自分が教師のまね」とをするとは……そう思う自分がいる。こんなことになるとは思わなかつた。不機嫌にさせられて、腹いせのように彼の話すことにはいちゃもんをつけていたら、いつの間に彼に物を教えることになるなんて思いもしなかつた。もちろん、それは彼とこうして明日も会う約束をすることであり、同時に自分がそれを楽しいと思つていいことでもあつた。今まで束という存在の上に張り付いていた普通の仮面を彼の前でかぶることはなく、こうして『普通』にいられる。

そこではつとした表情を作つた。

……敬語、忘れてた。

それもすぐに、まあいいか、と打ち消す。どうせ自分が先生なのだし、自分が敬語を使わなくともいいでしょう。と一人納得する。もちろん、根本的な部分では彼の方が年上であることを忘れるつもりはない。しかしそれでもこのくらいはいいだろう。東は一人首を縦に動かして、また歩き出す。

思えばいつの間に敬語を使わなくなつたのだろう。最初からのような気もしないでもないし、教え始めてからのことのような気がする。

「ちがうがどつちなんてどつでもこことだが、本当に意識しないうちの脱敬語だつた。

きっと周りの人が今の束を見たら、驚くだろつ。いつも笑つているものの、どこか堅かつた束の表情は満開ともいづべき表情だつた。そんな表情を彼女が撮つていることは、きっとまだ知らない。

街頭に照りやれた道が家までずっと続いている。周りには民家のみで束が歩くこの道に特にいうこともなくつまらない。でも今日の束は鬱屈を溜めることもなく、飛んてしまいそうなほど軽い足取りで結局家まで帰るのであつた。

だから私はI-Sを作った。

だから私は宇宙を目指した。

だから私は世界を変えた。

彼が私を見てくれたから。

私は私のすべてを使って、きっと世界を私色に染め続ける。

それが私が彼にできるたった一つのことだから。

～ある天才の独白より～

第四話（後書き）

感想求む。
いやマジで。

第五話

～ある教師の客観的『彼女』～

えっと、初めまして。

私は学園で教師をやせてもらつてゐる です。

わけあって名前は言えませんが、一応大人の女性なんですよ。

実は……今まで職場に女のひとしかいなかつたのに、最近になつて男の人気が来たんですよ。

で、いろいろあって、ここの前初めてあの博士と会つちゃつたんです！

とてもあのI-Sを作つたような人には見えないんですけど、やつぱりあの人があつたんですよね。

私が知つてる博士とは全く違いました。

やつぱり生は違いますね。

一応知識として知つてたんですけどね。

でも本当なんですね 身内しか認識できないっていつのま。

あそこまでいないものとして扱われるなんて知りませんでした。

私が知っていたのは、あの人の外のことだけでした。

若くしてISDといつ既存の技術をあらゆる点で越える発明を世に送り出した天才。

その美貌さえも神によつて作られたようなその姿に、誰もが目を離せなかつた、と言われている。

調べれば調べるほど、理解できないほどの技術の数々。

どうしてアレに誰も目をつけなかつたのか、皆が首をひねるようなもの。

ISDが登場した以降の歴史を語ることはしないけれど、間違いなく博士たつた一人の発明によつて世界が変わつた。

男尊女卑の世界から女尊男卑の世界へと、世界は姿を変えた。

それが博士。

それをたつた一人で行つてしまつたのが、博士だつた。

それが私が知つていた博士だつた。

でも、今日同僚の先生が教えてくれた。

あの人は好きでそなつたわけじゃないんだつて。

誤解しないでほしい、博士は優しい人なんだ。

第五話

最近続いていたカラッとしていた夏の日。今日は田差しがきつく、道行く人の額を見れば誰もが暑そうに汗をかいていた。

束が教えることに面白さを覚え始めてから、彼に青空教室を開き始めてからすでに十日が立っていた。あれから変わらず束は厳しく彼にたくさんの知識を教えていた。束もやる気が溢れてくるのか、自宅である程度調べて事前に準備を完璧にしてから授業に臨み始めた。おかげで彼の実力もうなぎ昇りだつた。

今も一人はベンチに座つて楽しそうに話していた。

最近は一人とも夜だけでなく、昼にも会うことが増えてきた。

そのすべてが束からの声なので、彼は特に気にしなかつたが、束は他の人の誘いも断つて彼と会い始めていた。

そんな夏の昼のこと。あまりに暑い日差しを惡々しそうに睨んだ束が、見事なまでの爆弾を彼に投下した。

「お兄さん。今日、家来ない？」

世界が止まつた。

彼は完全に動きを停止。あらゆるエネルギーを放棄してしまつていた。

「……わへや？」

「i t - s t o o h o t」

いや、そうじやなくて。

彼は束に思わず声を荒げそうになつた。同時にそれはまずいだろ、と。

あまり深く考えたことはないけれど、いつも小学生と毎日のよつに会つ高校生とこう絵面だけでますいところに、赤の他人の高校生が小学生の家に入る。まずい、まず過ぎるではないか。

彼は束の家に行つて紹介された時、束の親に通報される姿が瞼の裏に浮かんだ。

「いや、さすがにそれは」遠慮させて

「でもほんとに暑いんだもん。これじゃ授業にならなー」と

「……でもなあ

彼自身も額の汗をぬぐいながら、暑いと呟いた。

「だつて39度だよ？ 日陰でも35度あるんだよ？ こんなので勉強できるわけないし」

現在の気温は夏らしき暑さだった。ベンチは日陰にあるが、それでも風邪すら暑い。今日はとても集中して勉強できる状況ではない。

「どうかの公民館とかでもいいんじゃない？」

「周りの人の目に耐えられる？」

「おいおい。普通兄弟に見られて終わりだって。束ちゃんもお兄さんって言つてゐる」

「……やだ

「とにかくね……かな？」めん[冗談]遠いか

「なんとなく……かな？」めん[冗談]遠いか

彼は頭の中に地図を浮かべた。確かにここからそれなりの距離がある。小学生には厳しいだろう。

「う、じゃあ、今日はやめておつか」

「お兄さんは自分で勉強できるの？」

「一応できるんじゃないかな。最近は束ちゃんのおかげで英語も読めるようになつたし。今日はいくつか知識の収集つて奴に力を入れてみるよ」

「その言葉かっこ悪い。ナルシストみたいだよ」

「……」

「とにかくやだ」

そんなん、と彼が天を仰いだ。

「そんなに私の家に行くの嫌なの？」

彼女は悲しそうに首をかしげた。

「別に部屋も汚くないし、変なにおいもしないよ？」

彼がしぶる理由を考えて、自分の部屋が汚く見られてことしたら、悲しかった。

「昨日掃除機かけたから綺麗だよ」

彼はそれに小さく笑つと、そうだね、と小さく口づかむ。

「ほら、束ちゃんなら分かると思つたび、一応俺にも世間体つてものがあつたら」

「そこまで他人のことなんて気にしないよ」

「あつやつぱりてくれるね

「だつて私じゃないし」

束がにつゝつと笑った。

「はは……そりですか」

彼が乾いた笑いを上げると、余計に束が楽しそうな顔をする。

「ね、だからじこ、ちゃんとHアロンもあるし。体にひょうづらい温度を保つ特別製なんだから」

腕をひかれた彼は諦めたように束についていく。何だかんだで彼は束の授業を楽しみにしていて、キャンセルすることはしたくないのだ。

「オーケー、オーケー」

束はよかつたとこつゝつすると、肘から手に変えて、彼を引っ張つていぐ。

「捕まつちまつたよ」

彼はめんどくさいのに頬をかいて、結局束の隣を歩くのだった。

運のいいことに束の家には彼女以外の家族がおらず、誰にも会いそうになかった。

……ちいさな女の子と二人つきり。

字面にすると危ないことこの上ないが、あいにく彼はそこまで愚かではない。親にいろいろと言われる未来を回避したことに安堵していた。

「へえ、意外」

そんな彼が束の部屋を見た時の第一声がそれだつた。

あまり女の子らしくないシステム的な部屋。床にごみは落ちておらず、整理整頓が効いている。しかし生活感がないわけではなく、出窓や机の端にちょこんと小物が置いてあつた。

彼の声に束は恥ずかしそうに俯くと、わざと元気な声で、早く座つてと彼を急かした。

束の照れ隠しに彼はまた楽しそうな顔をすると、大仰なポーズをとりながら周りを見回した。

「おお、この机の上のねいぐるみはウサギか。束ちゃんらしくてかわいいね」

「もう、お兄さん！ 勉強しに来たんだから、そんなことしなくていいんです！」

彼が手にとつて感心したような声を上げる。束はとつとう我慢できなくなつて、俺のところまで飛びよじ近づいて彼を無理やり座らせた。

「くくく

彼がそんないつもの束とは違つ姿に可笑しそうに喉を震わせる。

「うへへ

束は彼を睨む。いつもは理路整然と彼にたくさんの専門知識を教える彼女だが、今の姿は小学六年生の女の子。

「ばかあー。」

ボスボスと彼を叩く姿は、六年生といつよりも一年生くらうか。少なくとも彼には愛きょうの感じられる姿だ。

「『いぬごじめん、はじめてやるから』

ちゅうとテンションが上がつてたんだよ。彼は一やつと笑つた。

「……そんなデリカシーのないことしてると嫌われますよ」

叩きたりないのか束が不満そうに彼を睨む。

「わりー。でもなあ……いや、なんでもない。ちやつちやと昨日の口を教えていますか

少し分が悪い。彼は気づかれないようになりたて次の話を持つてきた。もちろんその程度の話の流れの機微を分からぬ束ではない。口をどがらせて不機嫌さをアピールするも、彼は見てないふりをしたまま衛星について書かれた本を取り出し、昨日まで使っていたページを開くのだった。

結局、そんな彼の姿に一度息を吐くと、彼女はいつものように彼に勉強を教えるのだ。

束は彼のノートに簡単な解説を書きながら、ふと思った。

……どうして彼はこんなに頑張るんだろう。

以前はどうでもいいと切り捨てた理由が、なぜか自分の部屋で勉強をしている今に限って気になつた。それは自分の部屋と言つある意味で一番安心できる環境で余裕ができたからなのか。束には判断できなかつた。

すこし難しい論文を読みながら彼がうんうんとうなつてている。

束には簡単に理解できたそれも、彼のような普通の人には難しいようだ。

今までならば、簡単に理解できないことにいろいろとしていた自分。しかし、今は彼の困った姿を見ていると自然に笑みが出る。彼の様子は束の琴線に触れるのだ。今までにそんなことはなかつた。教えて理解されないストレスと戦うのが、束と言つ少女だつた。

さらば年下の少女にわざわざ頭を上げて教わりたいと思つたのだろうか。

束は人に教わる「う」と思つたことがない。

だから余計にそうしてまで宇宙へと足を進める彼の姿が不思議だつた。

束は頭をがりがりと書いてノートにまとめていく彼をじつと見る。よほど集中しているのか、そんな束に気がつく様子はない。束は髪がぼやぼさになつていてく様子を克明に眺めていた。じつと見ているところの一週間では気がつかなかつたことがいくつもあつた。

容姿はやつぱり普通だつた。前はなかつた二キビが出来てる。束は栄養のバランスが悪いのかな。と心配しながら、もつと見た。

……少し鼻が高いかな。日本人にしては珍しいかも。あ、唇はプルプルしてる。ちょっと光つてるからリップでもぬつてるのかも。

「…………ああ、わかんね！ 束ちゃん！ ここ教え……て、つてどつしたのこつちみて」

じろじろと観察されていることなど梅雨と知らず、彼が声をあげて束をみた。

「え、な、なんでもないよ！」

まずい、と思わず焦る。

あわあわと胸の前で手を振り顔を見られないように俯かせて、彼のノートをみた。幸いにして彼はそんなに束の顔をじっくり見なかつた。

たので何も気がつかなかつた。もじじっくつと見られていれば真つ赤な顔を見られていただろう。

「ビートがわからんないの？」

なるべく動搖を隠して声が震えなによつ氣をつけで言つた。

「えつと、こゝ。なんか本文読んどもせつぱつ。宇宙での活動における放射線との影響とかいわれても……」

「そつか、今まで軌道とかの計算ばつかりだつたもんね。そういう系統はまだやつてなかつたね。……とりあえず今日はそこを飛ばしてやう。明日そつち関係をやるから」

束がすぐに彼のできない原因に思い当たると、明日のカリキュラムを組んでいく。

次はどうなことをやう。ビートやつたら彼は分かりやすいかな。

束が好きなのがこの次のことを考える時間だつた。でも、今日はちよつと違つた。さつきまでの何どどこの疑問が束の意識の片隅に常にあり、どうしても氣になつてしまつたのだ。

「……ね、おにこさん」

「どうしても、氣になる。

今までだつたら絶対にこんなこと考えなかつた。考える必要がなかつた。自分のことで手こつぱいなのに人のことまで手は出せなかつたのだ。

でも今は知りたい。すこぐ、知りたい。

彼がどうして宇宙を夢見るのか。あんな真空の、とても人の生きてはいけないような世界に彼がなぜここまで魅了されているのか。それが知りたい。

もしかしたら、それは自分にとつてなにか大切な何かになるかもしれないから。

束はそつと、薄桜色の唇を開く。

「どうして、そんなに宇宙へ行きたいの？」

彼は笑った。束の真剣な様子に気がついてなお、彼は笑った。

「今頃聞くなんて……とつあえず」にはお約束的に言つておこうか。
今更どうしたんだよ」

「今更つて……ただ聞いてみたくなっただけだよ。……ちょっと聞くのは遅くなつたかもしけないけど」

ばつの悪そうな顔をしてしまう。それでも彼から目を離さない。

「そうだなあ。別に大したことじゃないんだけどな」

「大したことだよ。普通は年下の、それも小学生に頭下げてまで教わろうとは思わないよ」

「やういえばそらがも……」

「それだけやりたいから勉強してるんでしょ？　その理由が、私は知りたい」

彼がうなルような声を出す。迷つているように見える。

「うーん、ま、嘘はいけないか……」

しかし彼は隠すようなことでもないかなといつと、どうといつこともない晴々とした顔をして束を見た。

「これには海よりも深く、山よりも険しい理由があつてな」

束はあんまりな導入にがくつと肩を落とす。それでも彼ならこんなものか、そう納得して耳を傾けた。

「笑つちやうかもしけないけど、俺宇宙飛行士になりたいんだよ」

「宇宙飛行士？」

「そ、あの宇宙へ行つていろいろな実験やら観測やらをする仕事」

彼は束から目を離した。その視線が捕えたものは彼が持つていた携帯の待ち受け。アラスカでとられた星の瞬く夜空の写真。彼はそれを見せってきた。

「これ、親父がとった写真なんだ」

その写真は美しかった。携帯の画面では洗わせる画素数なんて大したものでもないのに、束の心を掴んで離さないような魅力があった。

日本では見れない天の川が綺麗な青を描き、一等星がその存在を見せ付け、小さな星の光ですら七色に輝いている。

「す」「い……」

知らず感嘆の息がもれた。

「だろ？ 僕もさ、初めてこれ見た時は感動した。実際に見てみた
い……本氣でそう思った。でさ、それを親父に行つた時、親父が言
つたんだ　　宇宙に行けば地球上のどこで見るより綺麗なんだ
ぞ　　つて」

誇らしそうに胸を張つた彼が、自分もまたこの写真の魅力に取りつかれることをうれしそうに見ていた。

「それがきっかけ。別に大したことじやないだろ？ その後はいつの間にか星座の本とか買ってさ、いろいろと調べてるうちにね、いつか宇宙に行きたって本当に思つててわ」

彼が恥ずかしそうに俯ぐ。自分の夢を誰かに、年下の女の子に語ることが恥ずかしかったのかもしれない。

……別に恥ずかしいことなんかじやないよ。

束は口に出しそうになつた。

……私なんて……

今の自分と彼の夢を語る姿。どちらの方が正しいのか。家族か、夢

か。他人か、自分が。

束は知らず彼をじっと見ていた。

……もしかしたら、ついで、私はついやましいのかな。

眩しい。彼の姿が束には夜空に輝く星のようになってしまった。人口の光に負けてしまうこともある星の輝き、それでもそこに確かに存在し、今も誰かを魅了し続ける星の光のような彼が、束はうらやましかった。

「でも、実はさ。本気で田舎そつと思つたのは 束ちゃんのおかげなんだ」

自分の矮小さを思い知られたような気持ちになつて、気分の沈み始めていたとき、彼が言つた。思わず彼の顔をまじまじと見てしまう。

……私が？

何かしていたのだろうか。

自分が彼にできたのだろうか。

彼のような一人間（夜空の星）に私なんかがか。

何かできたのか。

「私……何ができたの？」

「たくさんのこと。束ちゃんは俺にたくさんのこと教えてくれ

たよ

彼は満面の笑みを作ると束の目をみた。

「今まで本当は宇宙飛行士になろうって本気で思つてなかつたんだ。英語だつて読めなかつたしね。束ちゃんが俺にいろいろな宇宙のことを教えてくれたから、俺は本当に宇宙に行こうつて思えたんだ」

束は思わず口に手を当ててしまつた。それは体の奥底からあふれ出る何かをせき止めるためだつた。

「だから束ちゃん ありがとう」

束は必至でそれを抑えた。

自分でも分からぬ衝動が視界をにじませる。

……私でも、何かできた。彼みたいな人に何かできた。

人とは違う自分が、できることがあつた。

なぜだろ？ それがとてもうれしかつた。今までもいろいろな人にお礼を言われてきたのに、彼に言われた時、束は体が震えるほどの感情の渦が生まれた。

それは彼だけが束がなにも隠さないで話をできた人だつたからな。か。素直にいられた人に、こうしてお礼を言われたことが束にとってどれほどの価値があることなのか 束は自分でもわからなかつた。

束は何か言おうとするけれど何を言えばいいか分からず、ただ首を縦にふった。

「まだ遠い未来かもしれないけど、俺が宇宙に行って地球を眺めたらさ、その時ももう一回言うから 束ちゃん、俺はここまで来れたぞ。ここまで来れたんだ。どうだ、俺は夜空に映ってるか？……ってね」

その言葉は鈍い人にだつてわかるだろう。暗に言つていた。

私のおかげだ。ありがとう。

そう意味が込められている。束は誰よりも早く、それがわかつた。

「……聞こえないとは思ひけどね」

彼がはにかむように言つた。

束は心の中で何度も何度もそれを否定した。

「ううん、ちゃんと……聞こえるよ」

自分にその言葉が聞こえないわけがない、と。地球からどれだけ離れていても、彼がそういうてくれる言葉が、声が、聞こえないわけがないのだから。

「私だけはちゃんと聞いてるから」

彼は少しだけ息を飲んだ。

「……そつか。やつだね。束ちゃんにだけは聞こえるかもしれない」

「やつだよ。私には聞こえるんだから……だから、ね。ちゃんと私は声を届けて、約束……だよ?」

自然と束の頬が緩んでいた。

「……そだね。約束だ」

彼は束の頭の上に手を置くと、やつと撫でた。

髪型が崩れるとか、子供扱いされるとか、そんなことも忘れて束は田を閉じてそのぬくもりを味わう。彼の指先から伝わる温度は、どじが気持ちがよかつた。

温かい湯船の中こじるような、そんな感触。束はすっと田をあけると、今までのような自然な笑みを消してニヤリと表情をつべつた。

「ならちやんといけるように勉強しないとね」

「やうだなあ。もつとやらなことね。……じぱりくはむを合つてくれるかな?」

彼は内心、これ以上は時間的にきついかも、と思つが結局撫でられるままの束に促されるように領いて、そして彼女を誘つていた。

本当なら小学生を巻き込むことは褒められるひとでもないし、いやそもそも巻き込むこともできないか。

とにかく彼は束とこれからも会つことを約束していた。

「もううん。私はお兄さんの先生だからね。最後まで教えるんだか
ら」

そんな彼の誘いを笑つてうなずいた束の心の仲は、何をいませり、
だった。

……もうどれだけ教えたと思つていいのか。これくらいで済むと思
つていいのか。

彼女は笑う。

久しく誰にも見せていなかつた、彼女本来の笑み。それを顔いっぽ
いに広げ、ひまわりのような表情と楽しそうな雰囲気をのせて、彼
女はいった。

「だからもう、逃がしてなんて

あげないんだからー」

第五話（後書き）

感想、誤字等あつまましたらお願ひします。

～ある科学者の独白～

私は神様を信じてない。

でも殺したいほど憎んでる。

田の前にいるのなら八つ裂きにして殺しちゃうへりゃ。

でもいないと思つてゐる。

ちょっとした矛盾。

殺したいけど、いないと思つてゐる。

いるのかな。

いないのかな。

別にどうでもいいんだけどね。

もう関係ないし。

私が何度も何度も後悔する一瞬は過去のことだから。

神様も過去へは戻れない。

だから、いいんだ。

きっとどれだけ科学は発達しても、時間を人類が手に入れる事はない。

だって

私ができないんだもん。

私ができないことを、どうして他の人ができるの？

だからこの先、どう頑張っても人類は過去へ行けない。

だから、もういいんだ。

もつすぐ火曜日の今日が終わって、明日は水曜日になる。それまでの後十分で束は空を見上げていた。

今日家に来てくれた彼の語った 夢。それは誰にでも成れるわけではなく、努力を重ねた本当に一部の人間だけが達成することができる夢だった。

束は彼がうらやましい。自分のおかげで成る決心がついたと語つてくれたことはうれしかったが、束はそんな夢を持っている彼がうらやましかった。彼のような夢を持つて輝いてみたい。そう思つてしまつのはばく自然のことなのだろう。

束は彼に影響されたよつに空を見え上げて星を見ていた。

……いつか彼もあそこに行くのだな。

空気は無く冷たい暗闇の海へ。

あの場所は危険でいっぱいだ。とても絶対安全とは言い切れなかつた。もしかしたら死んでしまうかも知れない。

束は背筋が冷たくなつた。

……お兄さんが死んじゃつ?

気がつけば束は机に向かっていろいろな図面を書いていた。

…… いれ…… は？

自分でも無意識と言つ他にないよつな、いつの間にかの作業だった。それでも彼女がよく見ればやはり自分の書いたものだつたとわかる。

こりこり所に自分の規格外さが出てくるのだ。

束が見つけた特殊なエネルギーを原料とし、持ち主に何らかの外的要因による事故がせまつた時、それから身を守る機械。のちの『絶対防御』の原型であつた。

そつと溜息を吐いた。

…… 私も、周りを気にしないでできたらなあ。

彼の夢を追う姿にあこがれた束。しかし彼女自身も夢がないわけではない。むしろ明確な夢をこの年で持つていた。

しかし、彼女にそれを叶えようとする意志はない。

家族に迷惑をかけてまで、彼女は自分の自尊心を満たすという行動をするつもりはなかつた。

…… 隠しておくことが…… 最善、なんだよね。

束は目の前にある図面を一取り眺めてすぐじて二箱に捨てた。

宇宙は危険な場所で、彼が怪我をするかもしれない。でもそれは今じゃない。

……まだ必要ないよね。

「ゴミ箱に入った図面が視界の端に映る。

……でも、これがあればお兄さんが怪我する」と……なくなるんだよね。

自分が作った発明品がどれだけ優れているかなんて束は百も承知だ。これを彼に渡せば彼が怪我することもなくなるだろう。だが、束は彼のためにその図面から機械を作ろうとは思えなかつた。

……お兄さんなら大丈夫。大丈夫……だよね。

あれだけ自分が普通の小学生でないと見せつけておいて、今更になつて怖くなつた。

彼はまだ束のすべてを見たわけじゃない。まだ、束の知能が優れていることだけしか知らない。束が自らもつともおかしいと思つこと、天才ゆえの『発想力』。

それを彼に見せたくなかつた。

束の持つている力をみた彼が、束に対する態度を変えるんじやないか。

そう思うだけで彼女はそれを作れなかつた。

……お兄さんに嫌われるのも、よそよそしくされるのも……いや。

だから彼女は作らない。

あらゆる発明を。その脳髄からあふれる輝かしい至高の発明品の数々を。

彼女は隠し続ける。

彼はもう大切なものだから。

…… いらないよね。そつそつ怪我することなんて、ないよ。

その優れた頭脳で考える。

あれがなればいけないような事故がそつそつ起ころうわけがない、
と。

心の奥深く、束に誰かが話しかける。

大丈夫。

まだ知らなくとも大丈夫。

もつもつだけ続けられるよ。

ね、だから……

知らず束の視界から空が消えていた。

見上げればさつきまでの空に雲がかかっていた。

束は何ともないその視界の中で、ふと思つた。

「明日、晴れるといいなあ」

束はいつも待ち合わせ場所で彼と話しながら、頭の片隅でこんなことを考えていた。

……」れどしう。

さつきからずっと悩んでいた『これ』とはポケットに入っているある物のことだった。それは丸い球体で特に装飾もない。手のひらサイズのボールだ。

しかしこれが外見に反し既存の科学力を上回る技術力が終結された発明品であることを誰が想像できるだろうか。持ち主に何らかの脅

威が迫った時、オートで対象者を守るのちの『絶対防衛』のプロトタイプである。一回限りとはいえ、もし世界に売り出せば瞬く間に広まることだらう。

昨日散々悩んで、結局褒められるかもしれないと思つて作ってしまった。

残念なことに彼を田の前にして、嫌われたりしたらどうしようと足を踏んでしまった束は未だに渡せていない。

ポケットで自己主張を続けるそれに意識を先ながら束はどうしようと考える。

1・普通に渡す。

一番無難な選択肢、しかしそう簡単にそれを選ぶわけにもいかない。もしこんな普通じゃないものを渡して束と彼の関係が壊れたら本末転倒なのだし。

2・渡さない。

つまりは現状維持。束が選ぼうとする選択肢の中で一番簡単に選べる選択肢だらう。勇気を出す必要もないし、今のままでも十分に楽しい。むしろこれを渡してできるメリットは彼の身の安全と、あるか分からぬ彼からのお礼だけなのだ。いや、彼ならきっとお礼を言つだらうけど。

3・まずは彼がどんな反応をするのか探つてみる。

なるほど、テメリットもないし、これでうまくすれば渡しても大丈

夫かわかる。最高の選択肢だ。ただ、束にそういうた言葉を誘導する才能がないということをぬかせば、だが。やるうと思つてもそれとない言葉がまったく思い付かない。信頼できる人には口下手なのだ。

三つの選択肢から選ばないとなんてできない。

このまま逃げ続ければ現状維持、つまりを選択したことになつてしまつ。別にデメリットがあるわけでもないから無理にそれ以外を選ぶ必要はないだろうが、褒めてもらえるという餌を前にして束は未だ決心がつかなかつた。

もしかしたら褒めてもらえるかもしれない。認めてくれるかもしれない。

それはギャンブルのときの『当たるかもしれない感覚』に似ている。

そう簡単には抜け出せない。事実束も抜け出せていなかつた。

「束ちゃん？」

彼が束の顔をのぞきこむ。

「え、ええー？ なにー？」

束はいきなりアップで映つた彼の姿に飛びあがつて距離を取つた。

「いや、心ここにあらずって感じだつたから」

「そつだつたかな？」

「そりだつたよ。ほーっとして。体調悪い？」

彼が束の額に手を伸ばした。手のひらで体温を測るとしているようだ。束はそんな手を一瞬振り払おうとするが、蛇のような動きをした腕に振り払おうとした腕は避けられて、結局なすがままになる。

「大丈夫」

「本当に？」

「本当。でも……もしかしたら体調悪そうに見えるのは昨日夜更かししたからかも」

特に彼も束の体温が高いと思わなかつたのだろう。首をかしげたタイミングを見計らつて言った。……内心夜更かしの話になつて、これは話を切りだすチャンスか？ とも思つたが、今は様子見に徹することにする。

「夜更かし？ 束ちゃんも夜更かしとかするんだね」

「む、それってどーいう意味？」

「え、ほら。夜更かしは美容の敵！ とかいいそuddだから。束ちゃんつて肌きれいだしね」

彼が束の頬を突ついた。何かしてるの？ 彼が言つたので束は特になにも、と返した。実際は自分で作った機械に肌をきれいにするマッサージその他をさせているが、ここの謙遜しておく。

そんな束の言葉に彼が大げさに驚いた。本当に何もしてないと信じたらしい。まだまだ女子に慣れてないなあと思いつつ束は話を変えた。

「ありがとう。……で、もう少しあげ出した課題は終わってるの？」

「もちろん。終わってるから声をかけたんだよ」

そうこうつて彼はノートを見せた。覚えることではなくて、応用的な新しい考えを自分で生み出す勉強をしていたのだが、絵つきで分かりやすくまとめられていた。

「ふ～ん。なるほどねえ。……「ん、合格～～！」

束は大きく を腕で作った。

「まあ先生の腕がいいからな。合格しないと怒られるわよ」

彼は言った。束の信頼にこたえて見せる、と。

「こうね。でもまだまだ。もひとつ知らなくちゃいけないことはたくさんあるんだから。それに体も鍛えないとな」

「やつぱり宇宙飛行士は体も鍛えてないといけないよねえ」

「でも鍛えても無重力のせいですべて骨が弱まるってのが……

「なんとも言えないけど」

「でも、行くんでしょう？」

「もちろん」

教え子の頼もしい姿。彼はこの僅かな期間で大きく成長していた。
それこそ人生経験の少ない束でもわかるほどに。

「ふふ」

別になにも笑う所なんてない。それでも束の唇から笑みがこぼれた。

……ああ、楽しい。

本当に楽しい。

束は自分で今、この瞬間が満ち足りていることを自覚した。

別にきつかけなんてありはしない。

ただ一人でこうして教え合って、彼の姿と成長を認めて、自分のことを隠さずにはいられて、束は自分がどれだけ恵まれた位置にいたのか、そのすべてを悟った。

心が軽くなる。体も軽くなつた。

どんどんと体が熱を持つていく。

束は自分でもそれを止められない。どんどん「ぼれる」との楽しさはどこから来るのだろう。

……彼に見られたら恥ずかしいかも。

そう思つても止められない。

必死に束が出した課題を解いていく彼の横顔を束は見る。一いちを見てくれることはなさそうだ。束は残念そうに肩を落とす。その時に視界も下へと落ちて、あるものを見つけた。

彼の手が、あつた。片手で本を上げて見ている姿でもう片方の手がペンを持ったまま残っていた。

じつとそれを見る。

束の小さな手よりもはるかに大きかった。

父の手よりも大きいのかもしれない。男の人特有のごつごつした手。自分のは凹凸の少ない滑らかな手で、彼のとは似ても似つかない。

それを束はじっくりとみた。

彼の手はこのじめじめとした夏の空氣でも乾いているように見える。

でも見えるだけで、本当は汗びっしょりかも。

束はそんなどうでもいいことが気になった。基本的に束は研究者らしい性格で、気になつたことは調べないと気が済まない。だからだろうか。気がつけば彼の手に束の手が重なつていた。

「「えっ！？」

意外とすべすべしている。あくまで見た目だけが「うつむきじて」というらしー。

なぜか開いた手にそつと指を這わせて彼の指を掴んだ。爪もよく手入れされていて、程よい長さで切り揃えられていた。まるでネイルをやっている女の子のような気のつけ方だ。束は男のくせにと感心してしまった。

「ええっーー？」

裏返して今度は内側をなぞる。

あんまり信じないが、友達とよく話す手相を見てみた。生命線はあんまり長くないが、金運は自分よりも長かった。

「ちよ、ちよっとーー！」

触った感じ、もちもちとする。べとべとしているわけじゃない。かなり触り心地がよい。束にとつてちょうどいい人肌の温度だった。

片手だけでなく、束は両手で彼の手を包み込むようにして掴んだ。

そのときビクリと彼の手が震えるが、そんなことでもいい。束は本能が欲するままにその手を自分の頬へと持っていく。

……温かい。

この暑い夏でも、彼の手は心地よかつた。

「た、束ちゃん……？」

彼が束の行動に我慢できなくなつて肩をゆする。その顔には正気を
わざぐる色があつた。

「ん……？」

束が上の空で返事をした。目がところどとなつていた。

「あの、そろそろ話してくれると……、うれしいなあ」

頬をかいて、彼はいった。

「え……」

束は目をパチっとした後包み込むようにして握った手へと視線を移して、彼をみた。その顔は真っ赤だつたことは心にしまつておいた。

次第に瞳孔が開いていく。

……ああ正氣に戻つたんだな。

急な動きをして束を驚かせないよつこしながら、後の爆音に備えて耳をふさいだ。彼は危険にはわりと敏感な方なのだ。

「ふにゃああああああああつーーー！」

そして束は真っ赤な顔で叫び声を上げるのであった。

束が真っ赤な顔で叫びをあげ、からかわれていた場所から離れたところで女の子が一人の様子を見ていた。

少女の名は織斑千冬。自他共に認める束の親友だ。剣道に力を入れているのが特徴の将来有望な美少女だ。

そんな彼女は、今自分が見ている風景が信じられなかつた。

いや、信じたくなかった。それが本音だつたというべきか。

親友の少女が年上の男の人とベンチで笑つている。

言葉にすればそれだけのことだ。

詳しく語るのならば、親友の少女が見たこともない顔で、年上の男の人と自分の約束をさぼつてベンチで笑つている、だろ？。

千冬は剣道の強化合宿に参加していく、今日やつと帰ってきたのだ。いつもさみしがり屋で自分に付きまとつてくる束だが、それでも親

友なのには変わりなくて、千冬も長い間会えなくてさみしかつたりもした。電話越しの口約束とはいえ、千冬は確かに束と約束したのだ。来週の水曜日三時から遊びに行こう、と。

だが、実際はどうだらう。

待ち合わせの場所にはいない。……それだけなら良かつた。束が自分との約束を忘れるなんて考えられなかつたが、それでも行けないときはあるだらうと納得できた。…………できたはずだつた。

彼女が千冬にさえ見せたことのない笑みを見せていいな
ければ。

あの笑みはなんだらう。

千冬は思わず自分に問いかけた。それほど今の束は千冬の知つてゐる束と違つていた。

今だからわかるが、束はもっと影のある笑いをしていなかつたか？

あれほど彼女が無邪気に声を張り上げたことがあつたか？

見る人を引き込むような表情を見たことがあつたのか？

千冬は公園の外、網の向こうから束を見ている。

今の自分の表情は、一体どうなつてゐるのか。彼女は自分でもわからなかつた。

なぜ、とも、どうして、とも思った。

考えても答えは出なかつた。

ただ、分かったことは、束が自分よりもあの男の人を優先させたといつことだけ。

……それだけわかれば十分だつた。

千冬は聞こえるはずもない距離でも、極力音をたてなによじりつと振り返る。

束がああして笑つているところを見たくなかつた。

合宿でまた少し強くなつたと、そう思つていたのに、実際はそうじやなかつたらしい。千冬は自分の心の弱さを笑い、そつと公園から離れていく。

……逃げているのだ。

千冬は親友だと思つていた束が、こうして自分よりも優先する人間がいて、自分のことを忘れて笑つている姿を、これ以上見たくなかつた。

だから、逃げる。

自分は何も見ていない。

また明日も時間はある。そう自分に言い聞かせて、どうとかして言い聞かせて、千冬は帰ろうと足を動かす。内心、震える体を隠して、気がつかないふりをして、彼女は歩いた。

そう、いずれ強大な力をもつであるひつ彼女も、今はただの女の子でしかなく。自分の弱さとは向き合えぬほど弱かつた。彼女は自分が壊れないようにと、内心で悲鳴を張り上げる強さしかもつていなかつた。

「 ちーちゃん……？」

だからこそ、彼女の耳にその声が届いたのは
ない運命だったのだ。

必然で、避けられ

束は見てしまった。

彼と笑い、口にてを当てて笑い声を我慢していた視界の中に
親友の後ろ姿を。

来週の水曜日にしよう。

頭の中に響いた声。よく覚えてる。先週の夜に千冬の命宿の終わり
に合わせて遊びに行こうと約束したときの会話だ。

時間は三時にしておこう。

今は……何時だ？ 針はとっくに三時を過ぎている。

つまり……自分は一千冬（親友）との約束をやぶった？

さあっと血の気が引く音がした。

視界の中に彼女がいる。それだけのことを束は認識できなかつた。

「ちーちゃん…………？」

本当に千冬なのか？ 確かめるよつと声がでた。

瞬間、彼女が走って逃げた。

その後ろ姿に彼女は偽物だと叫ぶ自分と、追いかけると謳ぎたてる
自分が生まれた。

「え？ エ……？」

「…………たばねちゃん？」

駄目だ。束の頭の中で約束が何度も響いて、彼女の体が何度も震えた。

「は、はやく追いかけないきや…………！」

束は震える手足に力を入れて走り出す。千冬の走りそうなルートはすぐに思いつくから、もう見えない位置に行つた彼女を追いかけるのはそんなに難しくない。けれど面と向かつて彼女に何を言えばいいのかまったくわからなかつた。

体の奥底から頭の奥までぐるぐると震えた。

どうして、どうして逃げるの？

疑問が喉まで浮かび上がる。

どうして、どうして？

冷静な思考の一部が茶番だと吐き捨てる中で、束はずつと走つてゐる。千冬の家まで最短距離を思い浮かべて先周りをする足に淀みは無いが、表情は淀んでいる。

全力で後先を考えないままに、道を曲がる。

「ひーちゃん！！」

束は一気に近づいた彼女の背中へと声を張り上げた。

不自然なぐらご千冬の体がぴたりと止まる。

「た、たばね……」

束が見つめる中でゆづくつと振つ返つた彼女の瞳が不自然にゆらゆらと揺れていた。

「ちーちゃん……」

……何を言えばいいんだろう。

結局思い浮かびもしなかつた言葉を探して口を開いては閉めた。中途半端に手が持ち上げられる。

「どう……した?」

千冬が小さくつぶやいた。息を飲む束の耳には小さな声すら耳へと正確に届いた。

「あの、あのね。ち、違うんだよ……」

「何が?」

「だから、えっと、その……私……ひー……」

束はまともない頭で必死にいい訳を考えた。

あれよつとしたわけじゃないよ。

意地悪したわけでもないよ。

私はちーちゃんとの約束楽しみにしてたんだよ。

しかしその言葉に説得力はあるのだろうか。いや、無い。千冬からすれば全部言い訳にしか聞こえない。

混乱した頭でもそれくらいわかる。

「わ、わたし……」

だから呻くよつて意味のない言葉を吐き続けるしかできなかつた。

「……私……だから、何?..」

束の目を見ながら千冬が口を開く。その目から束は視線をそらした。とてもではないが見ていたれなかつた。

「私……今日は、その　」

「言訳は聞きたくない

鋭利な刃物のような言葉が束の言葉を切り裂いた。

「…………忘れてた?」

千冬の言葉に束が勢いよく首を振つた。

「そんなことない！」

「ならなんで来なかつた！？」

大声に束の肩が震えて、一步後ろへ足が下がつた。

「だつて……」

「だつて…………なに？ ビツセ 忘れてたんだろ？」

千冬は吐き捨てるよつこつた。束はそんな彼女の様子に言葉もでない。そんな姿に千冬は余計に苛立つ。

いつもなら完璧に制御して見せる感情が、今ばかりはビツシヨウもなかつた。

「どうせ私よりもあの人の方が楽しいんだろう？だから私との約束を忘れてあんなところいたんだ！」

千冬は吠えた。その表情は泣きたつで、我慢できなによつな苛立ちを混せた表情だつた。

「ち、違つよーちゃん！」

「違わない！」

束はそんな千冬を落ち着かせよつと声を張り上げるが、千冬は聞かなかつた。

……………“どうだらうか。千冬には束の言葉のすべてが苛立ちと共に

言訳のように聞こえるのは、肌が逆立つように苛立ちだけが募る。

「私だつて覚えてたんもん！ 約束だつて何処に行こうとか考えてたもん！」

「……」

千冬の袖を掴んで束は言った。このまま千冬が友達じゃなくなつてしまつよつた背筋が冷たくなる予感に襲われたからだ。

それを千冬は思いつきり腕を振つて振り外した。

「こまわり　つー…………もうこい。私は帰るつ……」

田の前が真つ赤に染まつたよつた気がした。束の話した覚えていたといつゝ言葉がまったく信じられない。

「……つー？　『めん！　』『めんなさい！』

束が千冬の袖をもう一度掴んで言った。

喉が張り裂けそつな声でも、彼女は構わざ声を上げる。

思いつきり掴んだ部分にしわがついた。千冬は睨みながら手を叩いてグングンと歩き始める。

体勢が崩れた束は転びやうになつても千冬を追いかけた。

「『めんなさい！　謝るから！　ねえ、お願ひ！　待つてつ……』

伸ばした手が空を切る。

千冬は後ろから聞いた声を無視して歩いた。

「ちーちゃん… む願いつ…」

いらっしゃる。 束は少しくらい困ったほつがいいんだ。

「まつてよ……」

束はもつれそうになる足を必死に動かした。今までにないくらい力を入れた。 それでもしなければ震えて動きそつになかったから。

次第に遠ざかっていく千冬の背中を見ながら走った。息が切れても、足が震えても、束は走った 周りのことなんて何も考えずに。

…… そんな彼女がそうなることは必然だったのだろうか。

束の視界の端に巨大な物体が映る。

気がついた時にはもう 遅すぎた。

束は千冬を追いかけることに集中しすぎて何も見えていなかつた。今自分がいる場所さえもわかつてなかつた。

彼女が追いかけている場所は歩道ではない。何処にでもある道路だ。そこへ飛び出すように束が出たのなら……そこに車という物体が現れるのは当然の結末だった。

……うそ。

嫌に早くなつた思考がどうしようもない未来をはじき出す。

そんななかでも束は千冬に手を伸ばす。彼女は気がついてすらなくて、後ろ姿しか見えなかつた。

それでも伸ばした。

けれど、届かない。

その伸ばした手の平は千冬に届かず、必死に追いかける少女に届いたものは

「 束ちゃん……」

キキーッと弓も裂くような音に続いて「ンン」と鈍い音が聞こえた。

「…………え…………？」

呆然と束が呟いた。

…………おかしい。私は轢かれるはずだつた。

冷静な思考が動きを続ける。

……あの速度、タイミング。どれを見ても私がこうして尻もちを付いているだけなおかしい。

呆然と手を掲げて見た。傷はなく、綺麗な手だつた。

……どうして？

視線をそっと上げた。そこには前方が大きくへこんだ車だけがあつた。

自分は無傷なのに、どうして車は壊れているんだろう。

束は本当に何も分からなかつた。

腰が抜けていた。あまりにも突然のことに力が入らない。束はどうにかして立ち上がろうと手を地面につこうとして、何かに触れたのに気がついた。

「……？」

それは柔らかかった。

「あつ……」

それは束の足元にあつた。

「…………うそ、うそだよ」

それは束を押しのけた後のように戻がっていた。

「…………うれだよ。うれしきまつりるよ……ね

束の狭まつた視界がどんどんそれの根基へと走つていいく。

徐々にはつきりしていくそれ。

それはもう冷たくて……もう、束の身近なものに似ていた。最近は毎日見てた。少し前には両手で握つたこともある。

「…………う、うそだよ……

ぱつり、ぱつりと髪がおちた。

なんだか。束は濡れた田元をぬぐつ。

どんぐん溢れてくるそれをうつとおしことばかりにグイグイといすつてもまだ溢れてくる。

その雰は幸か不幸か、狭まつた束の視界を元に戻してしまつた。

広がつた視界で、みる。

「…………お、ここやん……

「…………おきてよ、おきてつてば

」

いつぶせでぴくとも動かない彼の姿を。

彼の肩をゆすつた。

伸ばされた手を握つて、何度も声をかけた。

それでも彼は動かない。

「返事して、じゃないと……明日は課題たくさん出しちゃうんだから。だから」

最後は小さすぎて、束にも聞こえなかった。

尻つぼみになる言葉と滲む視界。

束は何度も何度も声をかけて、ゆすつて彼を起しつゝある。でも、起きない。

……傷もない。血も出でない。なのに起きない。

束はわかつていた。でもわかりたくなかつた。

声をかけるのは、肩をゆするのは、知りたくないからだ。逃げたかったからだ 現実から。

でも、それは束の逃げる速度よりもずっと早くて、追いつかれる。

束は気がついてしまつ。

ぎゅっと握りしめた手。束の近くにあつていつも温かつた手。そこから伝わる脈が ないことを。

「いやあ……」

だから理解した。

もう彼は

しゃあああああああ

絶叫が、響く。

白い煙がもくもくと空へと上がつていった。からつとした夏らしい青い空へと上がる煙は遠くまでいつてもよく見える。束は黒い服装に身を包みながら一つの星もない昼の空をじっと見つめていた。

「おにこさん……」

唇から洩れた呼ぶ声を受け取るべき人は、もういない。すでに目の前の墓石の下で眠っている。束は別に死後の世界なんて信じていが、彼がここにいないことだけはしっかりと分かつてた。

……もう会えない。

どんなに望んだって、彼は戻つてこない。

彼は四日前のあの日、死んでしまった。

周りを見ていなかつた束を追いかけ、車にひかれそうになつた彼女を助けるために彼はその身を犠牲にした。即死だつた。吹き飛ばされた時に強く頭を撃つたことが原因らしい。法定速度を守つていたとしても、うちどころが悪ければ人は死ぬ。彼もそうだつた。別に外傷なんてなかつたが、彼は絶対に怪我をしてはいけない頭の中をどうしようもないほどにやつてしまつた。実に1・5tもの鉄の塊が40kmもの速度で軟弱な人の体に襲いかかればどうなるかな

んて、誰にでもわかる。そういう意味では……外傷のなかつた彼はある意味幸運だったのか。

「インを投げれば裏か表が出るよ」、彼もまた生きるか死ぬかは一分の一。人は簡単に死ぬのだ。

「…………」

束は黙つてお墓の前で空を見ていた。

空に星はない。

ぼんやりした頭の中で、人は死ねば星になるつてホントかな。そういう問いかける自分がいたことに気がつく。遠くで……彼の妹だろうか、彼にどこか似た顔立ちの少女が泣いている声が聞こえる。まだ兄が死んだことを納得していないのが、束にもよくわかつた。自分はすぐに納得してしまったのにああして感情を吐き出す彼女を見ると、自分がどこかおかしいような気がしてくる。

暑い日差しに照りつけられた黒い石。それは彼じやなくて、ただの石だ。彼はもう立ち上がらない。

……奇跡なんて起こらなかつた。そこにはただ現実が堂々と居座つているだけだ。

「束…………」

となりにいた千冬が小さく親友の名を呼んだ。その声は彼女を知るものなら驚くような、とても弱々しい声だった。彼女の目の下にはクマがあり、顔は何処となく弱々しい印象が彼女をとつてかわつ

ていた。まるで何かに取りつかれたような顔だった。

束は、どうしても思わず、ただ彼女に大丈夫だよ、と言返した。千冬とは対照的なまでにいつもと変わらない声。自分の所為でという誰にも攻められない地獄の中で千冬は、ただいつも通りでいる束が恐ろしく、同時にどうしてと叫び出したい衝動が彼女を満たす。

運命の歯車はもう取り返しのつかないとこれまで来た。

その俯いた視線の中で千冬はみた。綺麗に手入れを欠かされていなかつた束の指先。自慢なんだとひつそりと言つた彼女のいつかの表情が脳裏に映る。それが見る影もないくらいにぼろぼろになつていた。よく見れば爪は割れ血が固まつた跡があつた。それが何を意味するのか、千冬には分からなかつた。ただ、どうしようもない悪寒だけが体に溢れて、止まらない。何を意味することもない、何かに聞かせるわけでもない、純粹に千冬の唇から声が、もれた。

「 束……？」

ただ呼んだだけだ。そこに意味などない。しかし彼女はゆっくりと振り返つた。その視界のなかで千冬は見る。目の前で大切な人を失つた彼女は、自分のせいで大切なものを失つた彼女は小さく笑つていて、同時に 泣いていた。。

「ねえ、ちーちゃん。私、どうしても信じられないんだ」

束が千冬の瞳を見つめながらいった。

「……そう、なのが。でも、もうあの人は……その……」

「ハハん。そつちじやないよ」

「……そつちじやない？」

それ以外に信じられないことがあるのか。束は千冬の驚愕を気にすることもなく語る。

「お兄さんの心臓が止まったのはわかってるし、酸素の供給が止まつた脳の細胞が壊死しても生き変えられないのもわかってる。私が言いたいのはそうじやないよ」

ゆづくつと、しつかりとした声だった。現実を見据え、目の前の事実へと挑む挑戦者の囁つきだった。

「私が信じられないのは、私に作れないものがあった」と

「作れないもの？」

「そう。私ね、帰つてから考えたんだ。ビーッいたら 時間を戻すことができるかなって」

何を言つてゐるんだかわつ。本氣で千冬はさう思つた。そして気づく。

ああ、そつか。束、ほんとはまだ……

なんで手が荒れていたのか。それは束が今まで机にかじりついて
考えていたからだろう。

「でもね、駄目だった。私がどんなに考えてもできなかつた。今ま
で私にできなかつたことなんてないのに。どうしてだらうね。私が
本当に必要な時に、頭は役に立つてくれないんだよ」

嫌だ、嫌だ、嫌だ。束の瞳が爛々と光つていた。どんな手段でも
いい。もう一度、会うんだとその瞳が語つていた。

「束……あの人は、もう」

千冬は自分に彼が死んだ責任の一端があることを理解したうえで
束を諭そうとした。千冬の瞳に涙があふれる。

私があんな意地悪を束にしなければ。あんな子供のように癪癩を
起さなければ。今も束は笑っていたはずなのに。あの人は生きて
いたはずなのに。

震える体を叱咤して千冬は束と向き合つた。束が死んだ人間に固
執する。……それは束を笑わせていた彼も望まない選択肢だと思つ
たから。しかしそれに束は首を横に振るだけだつた。

「笑っちゃうよね」

唐突に、何の脈絡もなく束が呟いた。その乾いた音は千冬にだけ
聞こえた。

「私、お兄さんの名前も知らなかつたんだ。あんなに一緒にいたの
に」

田の前で存在を主張し続ける墓石に刻まれた名前、束は見覚えがない。彼女にとつてお兄さんは「んな名前の誰かではなかつた。

「ほんと……笑つちやうよね

本当に笑うしかないよね。あんなに一緒にいたのに。束は今も彼とかわした会話を覚えてる。何千と彼から送られた言葉、その中に彼の名前だけは無かつた。

「私、たくさんお兄さんに勉強を教えたよ。でもお兄さんは名前を教えてくれなかつた。どうして、だらうね。私には わかんないよ」

溢れる涙を、自然と束はぬぐつていた。それでもじとじん溢れる涙。

「お兄さん、すうじく優しかつた。ほんとのお兄さんみたいだつた」

今までずっと、それこそ葬式が終わつてからもずっと黙つていたのに、束の口はどんどんうるさはじめた。一度決壊した涙と共に、脳裏に彼の姿が浮かんでは消える。

「私が教えても、すうじく楽しそうにしててくれた。変な田でなんかない

見なかつた

わすが束ちゃん。わかりやすいね！」

「……楽しかつた。お兄さんと喋つてただけで、楽しかつた……つ

！」

溢れた涙が熱い。燃えるような感情の炎が束の中で揺れている。

束もまた、気がついた。

溢れる涙の意味に。その理由に。

「…………だよ…………」

余計に、涙があふれる。

「…………いやだよ…………」

もう会えない。

もう話せない。

それは変わらない事実で。どうしようもない現実だった。

「会こたいよ…………まだ、まだ沢山話したこと、あるんだから…………

もう、立てられない。

束は膝を地面についた。未だ溢れる涙がぽたぽたと落ちる。

「なの……なんで……なんでつ……なんでつ……」

がんつと地面をたたいた。石の破片が刺さって血が溢れた。それでももう一度叩いた。

「約束！ 約束したのにッ！ 宇宙からお礼をいって。私がそれを聞くつて！ 約束したのに どうして！」

涙に歪む瞳のまま何度も地面をたたく。気がつけば鮮血が待っていた。

「………… もう、もうやめりー。」

見てられない。自分が束をこいつして苦しめてる。そんな訳がないのに、千冬には束が攻めてるよいつな気がした。だから精一杯の声をあげながら束を抑えた。

「もうあの人死んだんだ！ 死んだ人は約束を守れない！ 束ならわかるだろ？！」

束を抑える千冬の手にも涙があふれていた。

「違うよ！ お兄さんは約束破らないよ！ だつて一度も破らなかつたし うそはいけないって言ってたもん！..」

「束！ いい加減にしろ！…… あの人死んだんだ！ もう納得しろー！」

「嫌だつ！ お兄さんはちやんと約束守ってくれるもん！ だつて！ だつて！.. じゃないと」

振り下ろした腕が力なく地面をたたいた。

「じゃないと お兄さん、うそつきになっちゃうよ。…… うそはいけないって、いってたもん」

ぼろぼろと溢れた涙の所為で、まともに喋れなかつた。かすかな嗚咽のみがふたりの間で響いた。

声を上げる。「これ以上ないくらい!」束は思いつきり声をあげて泣いた。どうして、どうして。子供のように純粹な悲しみと思いが束の胸のなかで今もくすぶつっている。それが辛くて悲しくて束は声を張り上げた。

「…………」「めんたこつー」

千冬も今は会えない彼に言葉を。締め付けるような辛さと真っ向から向き合つて、辛い痛みに耐えながら何度も何度も同じ言葉を言った。力なく叫ぶ束を抱きしめて一人は泣く。

「ああああ！ やだあああああ！ お兄さん！ お兄さん！ わたし……わたし……！」

小さい束の体を千冬はぎゅつと抱きしめた。束が壊れるくらいに。
そうしなければ束はどこかへ行ってしまいそうだった。

ひつゝ、ひつゝとしゃつくりを何度も束はあげる。涙は止まらずぼろぼろと流れていた。それでも時間というやつはずつと進む。しばらくすると束は体を震わせて空を仰ぎ見た。

「約束は絶対に守るんだ……」

その視線の先には小さな星が一つ、瞬いていた。本当に小さな光

が青空のなかにポツンと光っていた。

「私は約束を破らないよ……」

絶対にやぶらない。束は決めた。

「いつか、私は宇宙にいくよ。そしたら、お兄さんもほめてくれるよね」

宇宙に行って地球を眺めたりとか、その時ももう一回言つから。

彼がそいつたから、束は約束を守る。ただ彼の声が聞きたくて。約束を守ると決めた。お兄さんが宇宙にいけないなら、私がいく。

「だから……だから……っ！　私は絶対宇宙に行くんだ……っ！
絶対に、絶対につー！」

そして彼女の物語が終わって、彼女の物語が 始まる

^{ヒト}
^{ウサギ}

それから束は人が変わったようにして、すべてをあるものの発明に捧げていく。今までどんなことがあっても隠し続けた『天才性』を惜しみもなく使い続ける。いくつかの発明をして世界中から発明費を稼ぎあげ、自分だけの研究施設を作り上げて、束はある発明品のISを作り始める。自分の生活、家族の生活、世界のバランス、そういうふたすべてのものに興味の一つも持たずに彼女は発明を続けた。

その研究のペースは他人から見ればおかしすぎるものだった。世界中が彼女の発明に狂喜し彼女をもちあげたが、それにすら一片の興味を示さなかつた。そんな束の姿に親友 千冬だけはすべてを悟つた。

もう彼以外が束の目に入つてないんだ、と。

彼女がかるうじて認識できたのは親友の千冬とその弟、そして家族くらいのものだつた。それを知つた千冬はいつまでも罪悪感から逃げられなかつた理由と、振りかかつた逃げられない罰を悟る。

……私は、きっと束のそばにいなくちゃいけないんだ。お兄さんを殺して、その罰がきっとこれなんだ。私が束を壊したんだ。なら、

私は

そうして千冬は彼女と共にあり続けることを決めた。それがたとえどんな結果をもたらすとも、自分だけは束と一生付き合っていくのだと、そう覚悟を決めた。

……みて、ちーちゃん。どう？

千冬すら気がつかぬまに束はウサギの耳を模したカチューシャをつけていた。それは彼女が以前彼に束らしいとウサギの小物を褒められたからだと言っていた。宇宙からの彼の声を聞くために大きな耳が必要なのだとも。

……ね、できたよ。

時間がたち、彼女の作ったそれ　　ＩＳを見て千冬はただ誰にも見られないように泣いた。何も知らない人が見ればただその技術に圧倒されるだけだろうが、千冬だけは彼が束に望んでいた平穀を犠牲にして生まれたＩＳを見ることが辛かつたのだ。

ＩＳ　　その機能の数々に、束の優しさと彼への思いが詰まっている。束が渡せなかつた絶対防御、それは彼がもしＩＳに乗つた時怪我をしないように。人型で訓練をせずとも飛べて宇宙に上がれる機能、それは体を鍛えるのが苦手な彼のために。使用するためのテキストは日本語とわざわざ翻訳した英語が同時に乗つている、彼が英語は苦手だといつていたから。

束が作り出したＩＳは、彼女が宇宙に行つて約束を果たすためのもので、同時に彼の願いを叶えるためのものだつた。

しかし 束は一人で宇宙へといった後、結局ISを宇宙用として世界にださなかつた。

千冬はなんとなくだがその理由が分かつた。多分、束は自分の作ったISで宇宙を目指してほしくないんだろうと。ISで宇宙に行つていいのは彼だけなんだと。束はそう思つているような気がしていた。

なんだか、つまんないね。

束の提案したミサイルの爆撃をISで防ぐことで軍事的価値を見せつけISで宇宙を目指させない計画に千冬は何も言わずに協力した。それはそこにかつての誓いがあつたからだ。千冬の目の前にいる少女は、親友で、同時に逃げられない罰の形なのだから。

束という一人の天才は、何の理由もなく世界を動かし続け、翻弄し混乱を世界に与え続けた。

もう、彼女にはそれくらいしかすることがなかつたから。

そんな彼女の私室には…………今も英語で書かれた宇宙への本が大切そうに保管してあつた。

第七話（後書き）

ぼつねた

何をとち狂つたのか、死ぬのはやり過ぎだろつと思つて、一度主人公が痴漢の冤罪で五年の懲役を着せられて、それから助けるためにISを束が作るというストーリーを書いていた俺がいた。実に200000文字もの超大作。これはこれでアリなんぢやないかと思つ今日この頃。……なにやつてんだる、俺。

みたいな人は感想へ、「もつとも簡単に男性を社会的に抹殺する方法は「」の を埋める回答（字数制限なし）を書いてください。
セーフ　タメ　ふじこ　ひ。

感想のぼつに要望が多数上がれば生存IFを書いつかなど
思つてゐる。

* その場合IS学園で束が教師をしている可能性が高いなあ。

生存Eテレ　一話（前書き）

あくまでEテレの物語。本編へは全くつながりません。

お兄さんが死んでしまって悲しいが、あれがこの小説の結末なんだ
と思つ人は見ない方がいいかと。

では、もしもお兄さんが生きていたら……をお送りいたしましょう。

「ね、お兄ちゃん。実は今日、渡したい物があるんだ」

「ん？ 束ちゃんが俺に？ いつものお世話になってるのに、なんだかちよつと申し訳ないな」

「ううん、そんなわけないよ。わたしどっても楽しいもん。ね、だからこれ、受け取ってくださいー！」

北海道に作られたある施設。その渡り廊下を楽しそうに鼻歌とともに歩く女性がいた。彼女の名前は篠ノ之束。抜群のプロポーションを見せつける様にして歩く彼女だが、周囲から沢山の視線を集めていた。がそれは決して負の視線ではなかつた。むしろ尊敬や憧れの視線を多分に含んだ熱い視線だつた。

「あ、束先生だ。こんにちは——！」

そのうちの何人かは束に実に親しそうに話しかける。束もそんな

反応が満更でもないようすで、はにかみながらも大きく手を振った。

「あれ、今日はお兄さんのお休みですか？」

「ちょっと用があつてね。そういうえば、昨日知り合いの教授に聞いたけど規定単位がもうすぐ取れそうなんだって？」

「そりなんですよ。流石にもう五年もいますからね。そろそろ卒業したいですか？」

「そっか寂しくなるね」

「でも私、いろいろ顔が効きますからもしかしたら教授の手伝いで残つてるかもしませんよ？」

「ふーん。それってつまり私に認められる自信があるってこと？一応言つておくけど、こここの雇い主は私だからね」

「とりあえずは、狙つてますとだけ」

束に話しかける少女はアメリカからわざわざ留学して來たとても優秀な学生だが、それでもここに残れるかは怪しい。そんなこの場所 IIS 学園は今日も束を中心に、今日も研究と学びを続けていた。

「」、IS学園が出来上がってからすでに八年の年月が経つた。今では学園都市のような様子をもつていてここは北海道の広大な大地をもつて作られていた。

少し話は昔へと戻る。

結局束はこの世界でもISを作り上げた。それは純粹にただ一人の男のために作り上げたということ、戦闘用へのアピールをしなかつたことくらいしか違いはないが、束は作ったのだ。ISという機械を。

なにが理由だったのか。それは純粹に彼のためだった。彼は当時ちょっとした事件で怪我をして左手の神経がおかしくなってしまい、後遺症としてはそこまで重くないものの彼の夢であった宇宙への夢は閉ざされる。それに束は猛反発。既存の技術で行けないのなら、自分が作って見せると息巻いてISを開発。彼の誕生日にプレゼントまでしてを見せた。とはいえたが、彼女すらも予測しなかった男性が乗れないという欠陥のせいで余計に彼を怒らせて、と一悶着あるのだがそこは詳しく述べない。

ともかく、いろいろと二人の間で起こった出来事（直接的に言つてしまえば彼と彼女の喧嘩だった）がおさまたた後に彼がこの発明を世に出さないのはもったいないの一言で束は世界にISを発表した。もちろん彼女の天才性も一緒にだ。

しかしこの時の彼女はすでに彼という存在を手に入れていたので、世の中に恐れられることの一切が怖くもなんともなかつた。その辺りに彼女の本性が見え隠れしてなくもない。

発表されたISだが、なぜか原作とは違ひ非常に世界に注目される。あれだけのものが放つておかれることはやはりないのだ。これはもう無理かと悟つた束はこれを契機にと、今までに溜め込んでいた発明の数々を発表し続ける。毎週のように発表される技術革新によつてしまらくは一年は束の姿をニュースで見ない日はなかつた。

それもそのはず、発表したものがものだつたからだ。1ナノの抵抗による電力の拡大や廃棄処分するしかなかつた石油製品の「ゴミ」リサイクル、はてはISを使用した宇宙開発による資源問題の解決など。ノーベル賞を総なめにしたのは言つまでもない。

あまりにも突き抜けすぎて束を確保しようと動き出した輩がいたのも予想の範囲内というべきだろう。もちろん彼女の捕まえることは波打ち際の彼にしかできないため、訓練されたエージェントの方々は束に辿り着けずらしなかつた。ちなみに大半は「存じ親友の千冬によつて撃破されたことも追記しておこう。

果てには束が作ったものによつて損害を受けたと、おいおいと言いたくなる様ないちやもんをつけて束を引き込もうとする国まで登場する始末。結果的に束のためにサミニットまで開かれてしまつた。

その場で決まつたのは全部で二二つ。

1、束は人類の共有財産とし、束が作り上げた技術は独占をする

ことをしない。

2、束の国籍を自由国籍とし、束が本人の要望から日本の土地に学校を作ることにすべての国が協力すること。

3、束はすべての国に対してなんらかの特別な接觸をすることを禁止する。

大まかにいつてこれだけである。

簡単に言つて束を独占しないで仲良く使いましょう。ということだ。もちろん束はただで使われる気なんてさらさらなく、束の目的であつた学校を作ることに各国の協力を得ることに成功するのだが。

そうして作られたのがI.S学園である。束本人が校長を務める巨 大なマンモス大学である。

I.S学園には当初の反応と違い、世界中から科学へとロマンを求める人間や束の発明の数々に惚れた人間が集まつてとんでもない人数が集まつてしまつ。そこにはとても優秀な人物が集まつて來ていた。

束はこれ見よがしに各国へとお願いをして、ここに学園として的一面を持ちながら科学者たちの街としての一面を併せ持つ街を作り上げてしまう。わずか一年で北海道の一部に18km四方の世界でも一番優れた街を出来上がつてしまふのだから束の影響力は恐ろしい。

もちろん学生へのフォローも忘れない。束は自分が好きだからといつ理由で研究と同じくらい学生の教育にも力をいれているのだ。優れた人間に教鞭を取らせて、さらには生徒たちが努力をしなければとても進級すらできないような大学を作り上げた。いまや、世界

でも一番優れた卒業するのが難しい理系の大学である。

一応校長である束だが、彼女が教えている教科は何かといふと、宇宙関係のものと、機械の発明における着眼点、気になる異性の落とし方、ISに使われているエネルギーについて、人工AIの開発とその応用、などなど多岐に渡っている。

どうやら今日の授業は気になる異性の落とし方のようだ。束は女性のみが入れる教室に気分良く入っていく。この授業は毎年非常にためになると人気で受ける生徒は抽選で選ばれるほどだった。

「じゃ今日は最後の授業の一回前だね。とりあえずは復習で過去に偉人たちの女性からの口説き方について復習しようか

束はすぐに全員の携帯にプリントを送信していく。

「ええー、大丈夫ですよ。みんな復習してるから、今更先生に復習してもらわなくとも自分でできますよ。それよりも先生のためになる話は聞きたいです！！」

束が用意したプリントを一瞥するだけで興味を失ったのか束の話をせがむ生徒。彼女は至って真面目で本当に復習を済ませているのだろう。束はどうしようかと思つてみると、みんなが期待したい目で見ていることに気がついた。

「はあ、仕方ないなあ。今日だけ特別だよ？」

束がため息を一つ落としながらじょりがないといふと、まわりの少女たちは歓声をあげた。

「やつたあ――― 束先生とお兄さんのなれそめだつてー。」

「実はずっと聞いてみたかつたんだ!」

「やつぱつすばりこ出合いだつたのかなあー。」

「束先生を落としたんだからお兄さんもわつとすばりこじゅうじゅうなんだらうなあ」

少女たちは好き勝手に予想をしていくが、束はあきれたように笑う。

「ふふん、違うんだなあ。むしろ私が積極的に捕まえにいったんだよ」

「ええーー、束先生がですか!/?」

「意外です」

束はそつと窓の外を見る。そして、小走りでぶやいた。

「そつか。もひ……八年たつたんだね」

「あれはもう八年前のことだね。もうすく気温の変化の激しい夏
だったと思う。暑かつたり、寒かつたり、大雨が降つたり。すごく
せわしない夏だったよ。そんな夏のある日に、私はお兄さんとあつ
たんだ」

「どんな出会いだったんですか？」

「やつぱり謎の企業に狙われていたときですか？」

束は少しだけ顔が引きつった。

「別に、道ばたで出会い頭にぶつかっただけだよ」

いたつて事実なのだが、テンションのあがつてる彼女たちには少
し物足りないらしい。

「ええ、うそだ。ほんとのこと教えてくださいよ」

髪の長い少女が眉をひそめる。どうやらもつと夢のある話を聞き
たいようだ。とはいえ、束としては本当のことなのに何で怒られな

ければいけないのだわ、困る。

「本当に。まあ、信じないのなら、こなだ」

束は不機嫌そうに顔を背けた。

「わわ、信じますってー！」

急いで「機嫌取りに走る生徒たち。田がもつと続きを、とこつて
い。

「じゃあ、もうちょっとだけ。私たちがあつてからのことだなだ、
普通に私がお兄さんに勉強を教えることになつただけだよ」

「束先生が勉強を？」

「そ、今君たちがやつてるのよつももつと簡単なことをね。私がお
兄さんに教えてたんだよ。私が学校を開いたのはそのときに教える
のつて面白いなあ、つて思つたからだし」

「へえ、この世界最高の学園、EIS学園の原点はそんなところにあ
つたんですか」

みんなが感慨深そうにうなづくのをみて束は心の中で笑つた。別
にそんなたいしたものでもないのに、と。

今や世界最高の学園と名高いEIS学園はやつていることは多岐に
わたつてゐる。世界中の技術者を集めに集めたおかげで、道が広が
りすぎてしまったのだ。そんなEIS学園にもしも彼が入学したとし
たら、卒業は……できるか怪しいところだ。この学園では本来三年

で卒業できるはずなのだが、今まで五年以内に卒業したもののがないといといえば、どれだけ難しいことなのかわかつてくれるだろう。

「その辺の話はまた今度ね？　ともかくじばらくは私がいろいろと教えてあげてたんだけど……」

「……いろいろ、失礼、鼻血が」

一人なぜか鼻血を吹いたが気にしない方向でいく。

「……教えてたんだけど！　ちょっとした事故があつてね。お兄さんのがけがをしちゃうんだ」

「あ、あれですか？」

「やつあのお兄さんの左手の怪我だね。あれは私をかばって事故にあつたときにした怪我なんだよ」

今でも思つときがある。あのとき自分がお兄さんに絶対防御の試作品を渡していなかつたら……と。あの日、渡した制御球は彼が束をかばつたときに確かに発動し守ることに成功する。とはいへ、一日で作った試作品。彼の体すべてを守ることはできなかつた。命そのものを守ることはできだが、彼の左手までも守ることはできなかつた。事故で彼の左腕は折れ、折れた骨が神経を傷つけて彼の左腕は動かなくなつてしまつたのだ。

「へえ、先生やつぱりドラマチックなことあつたんじゃないですか

「あのね。本人にそれを言うの？　実際に田の前でかばわれて引かれてみる？　血の気がなくなるよ」

さすがの束の額に青筋が浮かんだ。すぐさま少女が土下座ぱりに額を下げる謝った。ならよし。

「先生！ そ、そのあとはどうなつたんですか？」

「あ、ごめんね。……そのあと？ ああ、事故のあとか。その後はね、私が謝りにいくんだけど、お兄さんは何も気にしてなくてね。……夢だった宇宙にいけなくなつたのに、たいしたことじやない風に振る舞つてたんだよ。多分医者について口止めをしてたつもりなんだろうけど、どうしてもお兄さんの体の調子が知りたかった私はハツキングしてカルテをのぞいてみてたからね、お兄さんの手が動かないのは知つてたんだ」

「それで……？」

「みんなもそこからは知つてるでしょ？ 私はIRSを作ることを決めた。左手の動かなくなつたお兄さんが宇宙に行けるように。……普通なら左手の動かない宇宙飛行士はいない。だからいけないはずだつた。でも私はそんなこと認められなかつた。それでIRSを作つたんだよ」

「お、お兄さんのためにですか？」

「そうだよ。世界最高の芸術的発明の第一歩なんて言われてるけど、最初の動機はそんなんだよ」

「束先生の最初の発表作品が……まさかそんなあ。ただの色恋から生まれたなんて……」

ショック、と一人の女の子が机に突つ伏す。芸術品にも例えられるHISにきつといいイメージみたいなのが持っていたのだろう。もしかしたら白騎士にあこがれでもあったのかもしれない。束はあとでちーちゃんにフォローしてもらおうと心にメモを残しておいた。

「まあまあ。発明した理由はどうでもいいでしょ？」で、その後なんだけど、私はしばらくHISを作りながらお兄さんの家に通つ」とにしたんだ」

「通い妻ですね。わかります」

「「ど」」でそんな知識を覚えてくれるのか束先生に教えてくれる？」

黒人の女性がうんうんとうなずくのにちゅうとしたカルチャーショックを覚える。

「いまやオタクとタバネとコミケは世界共通語ですよ。知らなかつたんですか？」

「むしろセレニに私をいれるなと声を大にして叫びたい」

ふつ、と彼女は笑つた。何をいまさら。そう曰がいつていた。

「あれ、私生徒になめられてる？」

「まあまあ先生、続きを教えてくださいよ」

あ、うん。そつ束が首をひねりながらいった。

「えっと、私が通い妻を始めてからじぱらくはお義母さんに料理を

教わるつて名目で通つてお兄さんの味覚を確保しながら、さりげなく家族になつていつて。えつとその後は何したんだっけ。あ、そうだ。お兄さんに意識されないよつに距離を置いたんだ

「え、距離を置いたんですか？」

「うん。あのときはそのままいたら妹として扱われそうだったからね。しばらく距離をあけて、ちょっと心のガードが緩んだときに一気に近づいて女として意識させたんだよ」

なるほど。少女たちはさりげなく手元にあったメモ帳にメモをする。彼がいつた何気ない一言を覚えておくためにメモをする習慣を束がつけさせたその成果だつた。しかしあと見メモをしているようには見えない。そもそものはず、メモしていると男に意識されないようさりげなさを特訓してきたので、そうとは思えないのだ。なんという女の周到性。

「どうやって意識させたんですか？」

「お兄さんが疲れててぼーっとしてるとそこにお酒を軽く混ぜたケーキを食べさせて酔わせた」

「……それってなんといつか、毒みたいに使つてません?」

「束先生。今までの授業は結構『冗談とか入つてるのかと思つてしまつけど、まさかほんとにやつたことあるんですね」

ちなみに今までの授業では、過去の偉人たちが男を落とすためにしたことをいくつか実例にあげて知識を受けただけだ。……過去のことと侮る事なかれ。将軍のように絶大な権力を手に入れるために

過去の女性たちは外道とも言えるあの手この手を使って男を魅了していったのだ。現代の魔性の女つてレベルじゃねーぞ。権力のためなら手段を選ばずがモットーなのは冗談でも何でもない。

「それでその後、お兄さんに彼女ができるないように常に周りのことを探して、近づいてくる人がいたらほかの人と出会いを作ったりしてどけて……まあいろいろやって、最終的にお兄さんに私を襲わせて」

「あ、意外です。束先生が襲うと思つてたんですけど」

「だつてお兄さんに襲わせたまつが後々便利でしょ？」

「……今、私は束先生の本性をみた気がする」

今更だ。束は一人ひつそりと笑う。実際にはもっといろいろやっている。口では言えないようなあれやこれ。お兄さんには絶対に言えない。

「そのあと、お兄さんがいろいろ発表してみればどうだつているから発表して……まあ後はみんなが知つてる通りだと思うよ」

「世界を変えた発明の数々はお兄さんがいなければ発表されなかつた……つー！」

「衝撃の事実ね」

「別に隠したつもりはないけどね。といつか毎年話してるから、私の生徒はみんな知ってるよ」

束はため息を吐きながら思つ。毎年のせられて話してゐるナビ、この
れ、結構羞恥プレイだよねと。

「はー、じゃあ今日はこれで終わり。かこわーーん…」

「ええっ…? まだ早いですよ…」

「もう決めたの! 私は帰るから

やうこうや否や束は教室を出て家へと向かつた。しかしその足の
方向は学園の中心を向いていた。それもそのはず、彼女の家は学園
の中心にある。この学園は束のわがままから始まつたので文字通り
束が中心に作られてゐるのだ。

「～～」

束は上機嫌に鼻歌を歌いながら歩く。やつときまでの話でいろいろ
と思い出していた。今は落ち着いた気持ちが心を占めているが、そ
れでも少女時代に秘めていた温かい気持ちはなくならない。ふとし
た拍子にいつだつて心を暖かくしてくれるのだ。

「今日の晩ご飯はなにかなあ。お兄さんはなにしてるかなあ

束は今、間違いなく幸せだ。だつて自分を隠すこともなく周りに
受け入れられて好きなことをでき、なにより彼がいつもそばにい
る。自分の家に帰れば彼に会えるのだ。自分の一一番近くにいて支え
てくれるのだ。幸せでないはずがない。

「あの子ももう帰つてるかなあ

それだけじゃない。あの家には自分たちの最高の宝物だつているのだ。

早く帰つて一人の笑顔がみたいな。束はいつもそう思つてゐる。しかし束にも立場があつて、今の平穏な環境を保つためには自分とう存在が不可欠だとわかつてゐるからさばらないし逃げない。

いつもの帰り道。いくつかの道を歩き挨拶をしつつ最後の曲がり角を曲がると一気に視界が開けた。学園の中心。そこは束たちだけが入ることに許された領域がある。それなりに広い庭の中心に和風の家が建つてゐる。それが束の家で、帰る場所だ。束はにつこりと笑うと胸ポケットから鍵を出し、そつと鍵を開ける。

もちろん最初の一言は決まつてゐるだらつ？

束はいつものように、満面の笑みと幸せいっぱいの胸を押さえて言つ。

だつて、そうするのが?????

「ただいま——！」

?????家族つてものでしょ？

生存Eテ - 一話（後書き）

お兄ちゃんが全く出でこない眼。

束とお兄ちゃんの「ラブ」かと思つたかい？

だが断る！ 私の最も好きなことはみんなが予想していくことを微妙に変な方向に裏切ることだからだ！

なんて嘘つのば[冗談]です。

生存Eテは「話題」が本番だと思ってください。今回のは前振りつてやつです。もし彼が生きていた場合の束の周りの環境つてやつを説明するのが長くなりそうだったので一つに分けました。そのへんはお許しあれ。

ちなみに「冬」は「世界でもEテに乗つけられてます。束に雇われる形で世界中を回つてEテの使い方を教えたりしてます。

みなさん。たくさんのかんむりありがとござります。すいへうれしかつたです。

これから（多分後一話か二話）もよろしくお願ひします。

そつして時はすぎ、今は群雄割拠の時代。E.Sたちによる代理戦争と荒廃した大地。人は宇宙へと目を向けていった。しかしその計画へ旅団ORMCが立ちふさがる……っ！

「つひいつ未来はどう?」

「あほか」

いつものように束の話すとんでもない未来へのビジュロンを彼は鼻で笑つて聞き流した。内心では束がやううと思えばできなくないことを知つていて冷や汗だらだらなのだが、田の前で残念そうに肩を落とす束は知らない。

「だいたいあの子はそんな世界で生きていけると思えないんだが」

「あの子？ もちろん最高のヒュをプレゼントして魔王として君臨れやるに決まってるよ」

束の技術力は馬鹿にならない。一度はあきらめた夢を気に食わないという理由だけで叶えさせられたことのある彼は知つている。束が本気で田指した領域へと届かないものなんて数えるくらいしかなってことを。

かつて自分は「冗談半分に束に聞いたことがある。束にできないことつてあるのか？」と。そのとき束は実に苦々しい顔をしながらいつた。

「？？？？私にできなうこと？ そうだね多分、時間と男をヒュに乗せる」とくらいいだと思つよ。

事実束は今まで思いついたことのすべてを作つてきた。……とはいえ荒廃した大地なんて作つてほしくはない。

「……む、いいじゃん。そっちの方が夢があつて。あ、それともテンションがいつもヒヤッハーであべしつな世界の方がいいかな？ ね、ね！？」

「どつちも却下だつ…」

「ええへ、じゃあどんなのならいいの?..」

「そりやあ、あれだ。黒い球体に集められた人たちが宇宙人たちと戦うとか?」

「むむ、なかなか難しいオーダーだね。宇宙人が用意できるかわからないけど、あの武器なら楽勝できるから……うん、やってみるよー。」

「いやいや、あれやつたら誘拐だらつ」

「あ、そつか。じゃあどつしづよ」

「個人的には優しい世界の方がいいんだけど」

「優しい世界? 心臓麻痺が犯罪者にたくさんおこる世界?..」

「それは優しくないぞ」

「わかつた! 三分間のヒーローが活躍する世界だね!..」

「暴れたときの被害を考えような。そもそも怪獣がきた時点で危ない世界だよ」

「危ない? どんなのならやせしいんだよ。東さんはそろそろわからなくなってきたよ」

「やつだな。優しいってイメージで言えば、俺は夕暮れの学校とか

かな。なんだかんだで学校から帰るとせつて優しい気持ちになれた
し」

「ほほえ。学校の日々ですね。直訳すると？？？」

「はい、ストップウオッ！ 最終的な落ちが俺には読めたからー。
言わなくてもわかるからー。」

「うへ、それなら……ついで時間だ。今日はもうこくねー。」

「あいよ。…………じつしたんだよ、いきなり俺の顔じっと見て
「ほひ、しほりへ顔見れないから」

「へいへー。なうじつねー」

もうこって彼は顔を近づけた。

すると束はさつと皿をつぶつた。

「…………んつ」

「こつこまーーす！」

「こつこまーーす！」

二人は学園の内部にある家から入りて出る。今日はあの子が学校なので一人とも職場へと直行する。

「あ、先生。おはよーい」
「おはよーい」

「おはよーい」

束は学園で一番有名な教師だ。道行く人たちがみんな挨拶をしてくる。

「お兄さんもおはよーい」

もちろんその夫である彼也非常に有名だ。なにせ毎日束といふのだから。束は結構所構わずに抱きついてきたりするので、そっちの方向でも有名なのは彼にとつていいことなのか、悪いことなのか。少なくとも学園の男子のほとんどにモゲロと思われてるのは間違いない。

そんな彼は学園でもお兄さんと呼ばれている。

なぜか？

それは彼の本名がお兄さんだからだ。

……ちなみに冗談でもなんでもなく、昔束が初めてお酒を飲み過ぎて酔っぱらったときに彼の言った、俺の名前知ってるか？発言から束が知らないことに気がついて、それならとちよつとノリで国コンピュータにハッキング。本籍に国籍と彼の名前をお兄さんにかえてしまつたのだ。

もちろん普通ならそんなことはしないし、してもすぐに戻すはばだつたのだが、束は酔うと記憶をなくすタイプで……気がついたときには束は既に条約にサインしており国にちょっかいも出せず……結局彼の名前はお兄さんに決まつてしまつたのだ。発覚した次の日、束が一日中ベッドの上から立ち上がりになかつたのは秘密だ。

一応改名のチャンスはあつたものの、なぜか」とく偶然の邪魔が入つてできなかつたので、今もお兄さんはお兄さんだ。

「先生たち今田もラブライブですね～」

ちょうど分かれるあたりの場所で一人の生徒がいった。すこしだけ笑つているのは「愛嬌か。

「ふふん、うりやましいでしょ～。でもね旦那さんはあげないよ～」

「もういませんよ。だつてお兄さんも束先生にゾッコンなんだもん」

「えへへ、やうや～。」

束は恥ずかしそうに顔を染める。お兄さんは職場の人に毎年のようにからかわれていてるのでなれた。

「束、俺はさすがにもういくよ?」

「あ、うん。いってらっしゃい」

軽く頬へキス。彼は元気百倍と言わんばかりに微笑んで職場へと歩いていく。

「なんだか歐米的な夫婦なんですね」

じーっと束を見つめる少女の目が、ここは日本だ自重しろといつていた。

「いいじゃん。好きなんだし」

束は軽くスルー。ここは最高責任者でありどの国にも属さないエス学園の大統領のような地位にいる彼女は実に風紀を乱していた。一応学校の先生だらとこつツツコミはなしである。

彼の仕事は至って単純だ。IS学園の副校長として全体の監査をしている。例えば講義で手を抜いていいか。さぼっていいか。備品はそろっているのか。経費の申請は本当なのか。そういうつた束が嫌いな雑事を主に担当している。とはいって、一人だけできる訳もないでほかにも何人かいるが、一応彼はそういうつた役をまとめまるため役のようなものだ。しかしこれが忙しい。毎日のように実験があるこのIS学園では経費の申請書だけでもかなりの量になってしまつ。おかげでかなりの時間を使つてしまつ。束の開発したコンピュータのおかげで楽にはなつてているものの、それでもやはり人間が確認しなくてはいけない部分というのは確かにある。一応給料は束に負けている（そもそもゼロが五個ほど違う）とはいえ、愛する女性の作った場所を守りたいと思うのは普通だろう。こうした雑事の積み重ねが土台をしつかりとしたものとしているのだから。

束の内心としては、別に働くだけで専業主夫をしてくれてもいいのに……である。彼はわりと頭の柔らかいほうではあるけれど、それでも女人の人に養われるのにちょっととした忌避があつたらしい。前時代的な考えだとは思うが、がんばつて自分で家族を守りたいんだと熱く語られればほれた弱みで強く言つることもできない。ぶっちゃけてしまえば束は現在国籍をどこにも持つてないので所属税もなく、孫くらいまでは遊んで暮らしても使い切れないお金がある。

「じゃ、今日はこれで終わり。みんな各自で課題は行つておくように。やらない人は単位とれなくとも知らないからね」

「コンコンとまとめたプリントをそろえる。田の前の日の光が金髪につつてもかわいらしい少女が、その笑みをもつて束に話しかけてくる。

「あ、先生。そういうえば今度第一回ヤング・クロップIS世界大会って誰が勝つと思いますか？」

IS世界大会。それは束の意図しないISの形だった。当時の束はISを戦いに使うということがどうしても許せなくて、いろいろと裏でしたのをよく覚えている。ただ、そのときの騒動で親友を巻き込んでしまったのは今でも失敗だったと思つてる。

「世界大会？ ちーちゃんじゃないかな？」

だつてあんなになるとは思わなかつたんだもん。確かに束の作ったISに乗つたのは結果的に千冬が最初だ。それでも最高の操縦者になるとは思わなかつた。まさかの適正Sをたたき出し、世界中のISに喧嘩を売つてしまつとは思わなかつた。あのまま放つておけば世界中からバトルマニアとして指名手配されていたかもしれない。

なにがあれば最強を証明するといつて世界中を放浪するようになるのだろうか。まったくもつてバトルマニアの思考は予測できない。束が犯罪者をターゲットに移し替えなければ危うく犯罪者だつた。そんな経験から今の最強の搭乗者は間違いなく千冬だ。束は確信を持つていえる。

「即答ですか。私もそつ思つてますけど

「だつてちーちゃんだし」

「そうですね。オリムラ先生ですもんね」

一人は仲良くなつたうんと頷いた。

「そういうえば今はどこにいるのか知りますか？」

「この前私のところに整備にきたけどその後は知らない。確かネパールのほうで違法研究があるからとつちめてくるって言つてたけど…… わすがにもう終わってるだろ(ソ)」

整備を頼みたい。そういうつて束のところにきたのは一ヶ月前。弟の一夏には三日に一回は連絡を入れているのは知つてているが、それでもどこにいるのかはわからない。千冬は対外的に束のガーディアンという立場だが、束のそばに控えたことはない。むしろ自分から敵を求めにいつてる。

「さ、さすが戦女神。違法研究を暇つぶしのよつぶしにいくんですね」

「だつてちーちゃんだし」

「そうですね。オリムラ先生ですもんね」

あはは、と二人は声を揃えて笑つた。そこにほかの生徒が入ってくる。

「でも今年は結構優秀なのが出るんでしょう？ 千冬先生でも怪しいんじゃないんですか？」

「うーん。正直一ちゃんが負けるといじりを想像できないんだよね。周りは第一世代になつてはいるけど、一ちゃんの雪片はなあ、世代関係なく防御無視のチートだし……」

「やっぱりオリムラ先生の勝ちですね」

突っ込んできた生徒が肩を落とす。

「どうしたの？ そんなに一ちゃんに負けたほしかったの？」

「いいえ、なんというか、いつもあれですけどやっぱり大会なら賭けって必要だと思つんですよ」

「まあ、人の趣向はあれども、楽しむためのエッセンスにはなるね」

「ですよね。でも千冬先生がでちゃうと……はは、もうみんな千冬先生にかけちゃって……掛けにならないんですよ。誰も他の人にかけない。ISに乗らなくとも強い人のががをする訳もなくて……もう商売あがつたりですよ」

「それは……残念とこいつ」と。一ちゃんがぐなぐなるまで待とうね

束が慰めるようにこいつと、その後ろから低い声が響いた。

「やつだぞ。それに賭け事は禁止だ。先生の前で話をするなんていい度胸だな」

「「お兄さんー。」」

「すいぶん早かつたね」

彼は腕をまわして眠そうにあぐいを一つ。それに束はだらしないよ、と声をかけて襟をそろえてあげる。

「今日は少し部下がやつてくれるつていうから。ちょっと押し付けてきたよ」

「そつか。後でお礼にケーキでもあげた方がいいかな?」

「そつしてくれると助かるね」

彼は仕事が終わった後の氣だるい感覚のままふらふらとたつている。どうにも束の目にほお疲れのように見えた。

「もひ。私ももうすぐ終わっこするから、ちよつと待つて?」

おう、と小さく返事をした彼と一緒に教室を離れて束の研究室へと歩いていく。途中で生徒の二人は元気よく家に帰つていた。

少し束は不安だが、今日中にしないといけないことが後、二三ある。それをしないうちに帰ることはできない。すこし駆け足で研究室までいってすぐさま書類を片付けていく。彼は束の研究室に入ることなく、部屋の外に備え付けられた椅子に腰をかけて束を待つた。しばらくすると彼に誰かが話しかけた。

「あれ、お兄さん。束先生の部屋の前でビーハしたんですか?」

「ん。ちよつと束を待つてるんだよ」

「もしかしてけんかしちゃいました？」

「え、なんでそうなるの？」

「だつて部屋の前で待つてゐる」とは、束先生がすねて部屋にこもつちやつたつてことでしょう。

「ちやうぢやう」「ひ

部屋の外から彼と仕事の同僚の話し声が聞こえるけれど、少しでも早く仕事を片付けたい束はどんどん田の前のことへと集中していく。

「そりですよね。束先生とお兄さんが喧嘩なんてないですよね」

「まあ、一般的な夫婦よりも仲がいい自信はある」

「またまた。私知つてますよ？」の前の田曜日、ずいぶんとがんばつたみたいですね？」「

「……なんのことかな？」

「ふふ、私、実は日本の温泉が大好きです。それでたまに束先生なんかを誘つていくんんですけど……背中にちりんつて赤いマークがありましたよ？」

「……あ～それは」

「隠さなくとも大丈夫です。二人の仲を知らない人は世界中を探してもなかなかいませんから」

「いやそれはいいすぎじゃないかな」

「いえ？ 束先生が世界を変えられる人で、あなたは束先生を変えられる世界でたつた一人の人。ね、あなたは間接的とはいって、世界を変えられる人なんですよ。そんな一人が仲いいなんて情報が出回つてないって本当に思います？」

う、っと言葉に詰まる。それは要するにイギリスの皇太子の結婚事情みたいなものを日本人が知ってるような感じだということだろうか。世界中に彦星と織り姫のように熱愛だと思われていると思うとかなり恥ずかしい。そろそろ三十の大台に乗りそうだというのにそんな羞恥プレイは「めんだ。

固まる彼をよそに楽しそうに笑うと、それつきりで束の同僚の人は帰ってしまった。

「おわったーーー！ さ、かえろ？ つてびづしたの頭抱えて。やつぱり調子悪いの？」

歓喜の声を上げながら出てきた束が心配そうに彼を見た。

「いや、そうじやなくて予想以上の自分の有名度に泣きたくなつてきただけだから」

「そう、じゃ帰る？ あの子も待ってるだろ？」

束はそういつた後に周りを見ると、彼に手を差し出した。

「んっ」

彼は一瞬惚けたあとに、力強くその手を握る。よく手入れをされた手はすべすべで気持ちがいい。一人で田を畠わせてそつと微笑んだ。

「……」

「やうだね」

二人、固くつながった手をそのままに歩き出す。

「今日の」飯は何にする?」

「とりあえずタマネギと人参はあつただる。それになすもあつたはず。肉は……」

「なかつたと思つけど……あ、でもひき肉はあつたかも」

「そつか。なら今日は中華風野菜炒めとしますか」

「ええ、たまにはフランス料理とかにしようよ」

「俺が知らん」

「じゃあ私が作る」

「はあ……あのは、休みのとりやすい俺と違つて束は家にいる時間が少ないんだから、あの子ともつと一緒にいてやりなよ」

「……それをいわれると何も返せないよ。……やうだね、今日は束さんは全力での子の」とかまつちやうどおおへへ..

手を空につけただして宣誓した。もちろん手をつけないままだからか、彼が大きく体勢を崩す。

「 もちろん 」

「 つわづ 」

そのまま束が束に押しかかる形になつたが、彼がどうにか踏ん張つて倒れなかつた。しかしその代わりに束が彼の腕に収まつてしまつた。そして、そのままなぜか彼は束を離さない。

「…………えっと、欲求不満？」

「 んなわけあるか。ただちょっとね。ほら、家に帰ればあの子がいるわけだし。ここで束成分を接種しておいつとおもつてさ 」

そうこういとなら喜んで。束は彼の体に腕をまわして「 もちろん」と抱きしめる。抱きしめた腕のなかで彼の体温がどんどん束へと伝わる。

「…………ん」

束は彼の胸に顔を埋め、やがて満足できなことでもこいつに顔を上へと向け目をつむつた。

「 しかたないな 」

そうこうした彼もまんざらじゃない顔をして、そのまま近づけていく

て

夜は更けていく。いつだつて熱愛な二人はこれからいちゃいちゃしながら家に帰るのだ。

そしてそんな二人をお月様だけが見ていた　　はすもなく、周りを気にせずいちやいちやするから一人がラブラブだと学園の誰もが知ってるのだ。時に苦笑い、時に赤くなり、時に血の涙を流しながら、道行く人は二人を見る。

こつしてHIS学園の一日は過ぎていく。

生存Eテレ　一話（後書き）

一応これにて完結。

これからは番外編を更新するかもしれないくらいです。

血冬（誤字にあらず）のドイツ壊滅作戦や、【一生】一夏がEテレ学園に入学したら【卒業できない】などなど。いろいろネタはありますんで。感想の方でネタをくれたら早めにかけるでしょう。

いつか、どこかの小説で、また会いましょう。では。

専用機（笑）

世界で初めてE.Sに乗れる男が現れた日の夜。

「……俺も、のりたかったなあ……」

「……ごめんね。私が……なんにもできないから……」

「いや、束が落ち込む必要はない……かな。あれは仕方なかつたつて。それに……きっとこいつして一夏が乗れるようになつたってのは、なんかあるんだよ理由が」

「うん。私も、そう思つよ。もつお兄さんは夢を追いにいく年じゃなくなつたけど、さつと私がいつか……やひんじ約束をまもるから」

「束……俺はいい嫁さんをもつたよ」

「こまさらひへ」

「うん。なんか落ち込んでたのがバカらしくなつてきたかも」

「やつれい、お兄さんは落ち込む必要なんて無いんだよ。それに、お兄さんは立派な専用機をもつてゐるよ」

「専用機……？　いや、そんなの」

「あらよ。だつて私に乗れるのはお兄さんくらいなんだから」

「……あ～つまつやれつて」

「わ～とこりかやつと私の上ひいて」とかな。たまに逆にならう。
……あはは、自分でいつたけど恥ずかしいね」

「……」ねえ。ひょつと今乗るわ

「え……わやつー。ひょつとソフラーの上でなんて

「いや？」

「……む～、一人田がOKならこよ……」

「なら、どんとこだー。」

「わづー……若こんだか　あ～、やつれい……」

俺の話。

「よつ、一夏！ 久しぶりだな」

「あ、内田さん！ こんなにあわ。一年ぶりくらいですよな。前はお世話になりました」

「俺たちも千冬さんにはお世話になつてゐるしね。別に大丈夫だよ。あ、後その内田をさつて前のせいけりではあんまり伝わらないな」と思つ

う

「え？ なんで……ってそういうですね。そういうえば内田さんって篠ノ花さんと変わつてたんですね？」

「やつやつ。じじい学園じゃやつちのほうが通りがいいからね。……どうだ？ じじいこだる」

「ほんと、こちに来てから驚いてばっかりです。特に学食。自動で作ってくれる機械まであるなんて……ちょっと近未来すぎでびつきました」

「あれかあ。あれはや、東が一昨年に一つだけ学園のアンケートで頼まれたものを作つて企画があつてね、そのときの一位だったん

だよ。やつぱりみんな研究に熱中すると飯を食べるのを忘れるらしくつて。でもみんなできない研究を束にやつてしまいとかいわんだから面白じよな」

「なるほど。」*ヒルヒルしこどか*

「*セツヒコエバ*……前の学校のやついらになんか言われなかつたか？」

「いわれました。努力してないのに高学歴入手とかずるこつて」

「やつぱりか。……まあ、簡単にあげないけどな」

「あれ、なにかいいました？」

「いやあ？ 何もいつてないけど（笑）」

「やつですか？ あ、そつだ。内田ちゃんなくて篠ノ井せんつて束さんの連絡先つて知りませんか？ 実は今日束さんのところで検査を受けるんですけど、ちょっと聞きたいことがあります」

「ん？ それなら俺の名刺に書いてあるから一緒に渡しておくよ。
ほい」

「本当にですか！ ありがと^ウヒルヒルしこどか
え？」

「……頼む。なにもいわないでくれ」

「いや、でも。名前が本名 篠ノ井お兄さんつて……いや、え？
？」

「一夏……」れにはな、非常に複雑でかつ高度な政治的問題があるんだ！ わかつたらとつとど 行 け ツ ！」

中国からの留学生から見た二人。

「いへへへちへへへかへへ..

「おわッ！ いきなりどびかかってくるから誰かと思つたら鈴か！ ひさしごりだなあ」

「（抱きついてるつもりなんだけど……）そうよね。私が中学から転校して以来ね。……聞いたわよ？ 初めてのIRS男性操縦士なんですって？ もしよかつたわ、私が教えよっか？」

「え、鈴もIRS乗れるのか！？」

「そりゃもうだら。」う見て鈴は専用機持ちだからな

「あ、お兄さん！ こんにちわ。今日は束先生が背中に引っ付いてないんですね」

「……あんな。いつも束が引っ付いてる訳じゃない、ヒコウかくつ
ついたのはあの口だけだ！」

「え、でも一人はよく学校でくつこつて話聞きまわすけど」

「……」

「（内田さん……本当に兄さんって呼ばれてるんだなあ）……鈴、
その、いつも引っ付いてるってどうゆう意味？」

一夏、特訓という名のスキンシップと伝説の数々を知る。

「いいか一夏。……あまり言いたくはないが、お前はそれほど頭が
良くない」

「千冬姉。いきなり現れてびっくりしたんだけど。背後からぬって
現れないでくれ。それと俺はいつの間にアリーナに来たんだ？」

「セイは当て身をいれて……。と別に今いつでもない」
ともかくだ、一夏は頭が良くない

「……一度言つ必要、ないんじやないかな」

「ばかもの。今の自分の立ち位置の確認といつのは常に自分の精進のためには必要不可欠なのだぞ。……いいか、このHIS学園を卒業すれば高学歴と言われているか知つていいか？」

「そりゃ入学するのが難しきからだろ？」「

「それもある。お前は知らないだらうが日本は入るのが難しく、卒業するのが簡単な大学が多い。逆に外国では卒業するのが難しいわけだ。でだ、ここHIS学園はといふと……どつちも恐ろしく難しい。それこそ卒論に海外のメーカーのスカウトがわんさかくるレベルだ。現場でも即座に戦力になると非常に重宝されている訳だ。就職氷河期のこの「」時世でよりどりみどりなのはここいらへりしきぞ」

「はあ……それがどうしたんだよ。俺だつて知つてゐるぞそのくらい」

「いや、一夏！ お前は全くわかつてない。いいか？ 卒業するのが恐ろしく難しいんだぞ？ お前に企業に通用するようなレベルの卒論が書けるのか？」

「…………いや、が、がんばれば」

「はつきつぱりむけむけ。無理だ。そもそも進級できるか怪しい」

「……そ、そんな。千冬姉、俺どうすれば……」

「まあ待て。そのために私がいるんだ。いいか一夏。おそらくお前は私に似て運動神経はいいだろ？だからHSの操縦実習でどうとか単位を取り続けるんだ！　お前に中卒を逃れるすべはそれしかない！」

「う、千冬姉！　俺、やるよ！　だから俺を鍛えてくれ！」

「ああ、まかせろ。私は世界最強だぞ？　ビシバシいくからな？」

「おうー！」

と一夏がHSを着込んでアリーナにたつと、HSのハイパーセンターが周囲の音を拾つてきた。こんなに遠くの声も聞こえるつてすごいなあと感心していた一夏の耳に入つたのは

「あー、見て！　あの血冬^{ブラッティ・ワインタ}がHSを着てるわよー！」

「や、そんな！？　ここに誰か犯罪者でもいるのかー？　み、みんな避難するんだ！　細切れにされるぞー！」

「え？　どうしたのよ……って、ヤバい！　傾国の暮桜を着込んでるー。至急アリーナにレベルマックスのシールドを張りなさい！」

「う、うれよ……祖国ディッシュに血の雨を降らせたあのHSが起動してるなんて……」

「たたたたいへんよ！ ドイツ国籍の子がトラウマを再発させてるわ！ いそいで救護室へ！」

「いいからまずは避難するんだ！」

……なにやら恐ろしい声が飛び交っていた。

思わず冷や汗が吹き出した。

「あ、ちふゆねえ？ あのせ、周りがす、」いろいろ言つてるんだけど……その、俺はこれから何をされるの？」

「ん？ それはあれだ。この前見た文献に書いてあつたんだが、一度死にかけるような体験をすると人は強くなれるらしいからな……ちょっとと深く潜らせようかと思つてる」

「潜らせるー？ ピリピリー？」

「ピリピリ……下にだが？」

「それ物理的な意味で！？ それとも天国地獄の意味で！？ どっちにしてもこえ——よー！」

「大丈夫だ、問題ない。そのへんの手加減には世界一「うま」自信があるからな。それ、逝つてこい」

「ちよ、手加減ができるつてことは何度もやつてゐつて——。
？ つて、さあや————！」

東校長先生と妹の関係

「いちぢ。——昨日千冬姉に叩かれた場所がまだいて——」

「それくらいですんだことを天に感謝した方がいいこと思ひやが

「籌、さすがにそれは言い過ぎ……でもないかもしね。昨日は
散々だつたし」

「昨日？ そういうえば一夏の姿を見ないと思つたが……なにか
あつたのか？」

「ああ、昨日は動けなかつたからな。千冬姉が看病してくれたんだ」

「……（なるほど。つきつきりでスキンシップをとるためにわざと痛めつけたのか。さすが千冬さん。折り紙付きのブランだ）」

「おかゆとか作ってくれたし。結構おいしかったよ。それに途中からは鈴とかセシリ亞とかが見舞いにきてくれたし」

「む……私は行かなかつたわけじゃないぞ。その……知らなかつたんだ！」

「お、おい落ち着けってそんなに身を乗り出したら倒れるぞ、ってうわっ！」

「あやあー？……痛つ、おい一夏。その、大丈夫か……って貴様はどうして触ってるんだ！」

「いやち……ん？　って、うわあ——？」

「早くその手をどけろ！……そ、それとも何だ。それを触りたかったのか？」

「いや、全く。…………つてどうしたんだよ。おい、なんで手に木刀持つてんだ」　「おー？　まで、待つんだ算一！」

「待たん！　貴様の性根を叩き直してやるー！」

「あぶねえ！　うつむ。鉄の扉が壊れてるし。いや、待てあれを生身で受けたら……」

「天誅————」

「 もち———。」

思わず部屋から逃げ出した一夏。飛び出すように切り裂かれたドアを開ける。しかし部屋をでた瞬間になにやら柔らかいものに顔が埋まつた。

「あれ、こっくそビンッたの?。」

「た、束さん!/? 助けてください。」

「た、助けて? いきなつビンッたの?。」

「つ、後ろに般若が……。」

フルブルと震える腕で背後を指差し、束はそれを見るとあひやーと眉をひそめた。

「姉さん! 一夏をそのまま捕まえてください。私が今から叩ききつてやりますから。」

「 もつ……簞ぢやん?」

怒り心頭。真っ赤な顔の簞に束がたしなめるように声をかける。それにいくつも落ち着きを取り戻したのか、荒い息を抑えるようにはいた。それでも一回は叩いてやるかと思つてゐるのか目が怖い。

「うふうふ。落ち着いたみたいだね。じゃ、これ。はい。」

束はそんな簞にいつとした笑顔をしながら一枚の髪をわたした。

セリに書いてあつたものは

「なんですかこれ？ 請求書？ ドア代12万円！？ なんですかこれ…？」

「今篠ちゃんが串刺しにした扉はいろいろ防犯対策が使われてる扉だからちょっと高いんだ」

「内訳を聞いてるんじゃないんです！ なんで私が

「だつて壊したでしょ？ あのね篠ちゃん。普通ものを壊したら弁償するんだよ？」

「や、そんな。こんなお金ないです……その、えっと……」

「じゃあお母さんたちに手紙書くしか無いかな？」

「姉さん… その…ひ、秘密には、できないですか？」

「…………私は篠ちゃんのお姉ちゃんだけだし、この校長先生なんだからちよと見逃せないかな」

「そ、そんなあ」

「それと反省文をちゃんと書く」と。いい？』

「…………はい」

「それにしても、五一ちゃんの部屋の扉壊されひやつたし、扉が直

るまではひーひーさん家の泊まつてもひーひーが

「…………」

「こっくんは、そうだね。誰か部屋の余つてる人にたのもつかな~。
そうだ、篠ちゃんの部屋つて余つてない?」

「……！ 大丈夫です！ 余ります！」

「わつか。じゃあこっくんは篠ちゃんの家にしおりくは泊まつてね

？」

「姉ちゃん……あつがとひーがれこまかー。」

「……ふふ、種付けはまだわれひーだめだよ~。」

「……！？ し、しません！」

「私はね、幸せだよ。世界中の誰よりも」

もう誰もが寝静まつた夜の中での束がいた。縁側で月を眺める彼女は、なるほど。確かに女神と言われるだけのことはある。わずか三枚とはいって、束と彼のデートの写真に映った笑顔の束が載せられた週刊誌は今やプレミアがついてとんでもない値段がついているのが納得できるだけの理由がそこにはあった。

「今も幸せだし、これからも幸せでいると思う。あなたがいたから……私は幸せなんだ」

「……それなりに大変だったけどな」

束はおかしそうに口元に手を当てた。

「でも今思つと楽しかったよ」

「やつらか？ 僕は血のドライツ事件とかが頭に浮かんで鬱になるんだが」

「や、それは。でもほら旅行とかは楽しかったよね」

「話を変えたな。まあ、どちらにしても僕には辛かった。あのころは一人旅行に行くと必ず黒服のエージェントが現れるのがデフォだつたし」

「あはは……」

「あこつらがいるのもくるし。洗濯をしあわせてメインキャラコ

ーの洗濯機をあけた中にいたときは心臓止まるかと思つた

「あれは、さすがの束さんにも予想外だつたよ」

「あと適当によつた縁日にいた人間がすべてエージェントだつたときは死ぬかと思つた」

「全部の食べ物に残らず睡眠薬がまじつてたんだよねえ」

「極めつけにはお前をターミネイトするとかわけのわからん」とをいつたかつこいいおつさんが出でてくるし、どこからともなくダダツ、ダツ、ダダン！ って音が聞こえてくるし

「いつか近い未来でエジと人間の戦争が始まるのだ！ とかいつたね」

「……やつぱりいい思い出がない

「…………」

「でも、確かに思い返すと楽しかつたかもしれない」

「あなた……」

「いろいろ見れたし。いろいろ経験できた。まあ、普通の生活する分には絶対使わない経験だつたけど」

「そう、だね。きっと私がエネルギー問題を解決したせいで石油が売れなくなつて逆恨みした石油王に狙われた一般人つてあなたぐらいいだと思つよ」

「せうだよなあ。…………ちゅうとまじ、俺はそんな話聞いてないぞ」

「うふ。だつてちーちゃんが壊滅させたし」

「…………もつなにもこわんが。なににもいわんからな」

「それよつ……ね、私昨日お医者さんでこいつをあたんだ……」

「医者? どじか調子が悪いのか?」

「うふ。ちゅうとこことことがあって……」

「ここ」と……………

「ね、船か……どなんのこするか。考えておこてね、あなた?」

彼が事故にあってから一年の月日がたつた。

IS→束が異常になつたわけ→ 生存IF

中学一年の夏に陰謀と純愛が吹き荒れる

第一話 「……バカ」

その夏はやたら早い雨期の終わりと共に始まった。ミンミンと頬
んでもいらないのに耳障りな音を立てる蝉に辟易とし、照りつける太
陽にたまには休めと悪態をつきたくなるような夏。つだるような暑
さの中、コンクリートがこじわとばかりに熱を放つて遠くに蜃氣楼
が見えた。

「……あつい」

そんな都会特有のコンクリート地獄に非常に不機嫌な顔をしてつ
ぶやく少女が一人。

「そうだね~」

汗を拭う少女 織斑千冬の隣を歩く束は、まったくだと言わん
ばかりに同意した。

「そのわりには暑そうには見えないな」

「ふふふ、よくぞ聞いてくれました！ 実は今日は新しい発明を作
つてみたんだよちーちゃん！ その名も『服の裏につければあら不
思議。とっても涼しく感じちゃうの』だよ！ この一見ほつかいろ
にも見えるこの機械を服の内側に貼付けるとあら不思議。全然暑さ
が気にならないくらいに涼しくなるんだよ~」

「じゃじゃーんと口で効果音をつけながら突き出したほつかいろに似た何か。なんでそんなものが作れるのかなんて質問はしない。ただ千冬は不満そうに口を尖らせた。

「ほお？ つまりお前は私が暑いのを我慢していたのを笑いながら見ていたということだな？」

「ザツツ、ライトー」

瞬間、千冬の腕がかすんで束の顔面をつかんだ。いわゆるアイアンクロー。みしみしと回つに聞こえるくらいいの音が響き、束の体が宙に浮く。お前は本当に中学一年生か？ とこいつシツ ハリは彼女には通用しない。

「あたたた！ 中身がでちゃつとううー？」

対する束ももちろんそこにカテゴライズしてはいけない。割と本気で千冬が束の頭をかち割つてやるつもりしていふことに気がつくと、ポケットからぽろつと小さな玉がこぼれ落ちた。千冬が鷹の眼のような鋭さでそれをにらんだ瞬間、半径一メートルの範囲の眼をつぶす強烈な閃光が生まれる。さすがの千冬もまことに手を離して眼を守つた。

「ふいー。最近ちーちゃんの攻めが容赦ないような気がするよ」

「どうしてそうなったのか、今の行動を振り返りながら考えてみる」「ん？ 別にちーちゃん以外にはやらないから大丈夫！」

そういうことじやないんだ。千冬は思わずこめかみに指を当てた。昔はまともだったのに、最近束がちょっと自重しなくなってきた、と悲しそうにじぼした。……自分のことは棚にあげていたが。

「そういえば、昨日電話がつながらなかつたが……またお兄さんの家にいつてたのか？」

「そうだよ。昨日はね、とうとうお義母さんにお味噌汁で勝つたんだ！ 私のほうがおこしにんだって……」

束が満面の笑みで笑つた。千冬はあきれたよつて息を吐ぐ。

「最近は毎日じやないか。少しくらいこは私とも夜に電話してくれ」「え、『』、『』、『』めんね？ でもお兄さんも勉強もそろそろ終わるから。ちょっと力が入っちゃって」

「いいわ、今日は電話できるんだね？」

「うへん。やつきの今で悪いこと思つんだけど……今日も行くつてお義母さんこいつてゐから」

「…………」

じーっと見つめる千冬。束も悪いこと思つているのか、あんまり強くは出れない。こけなことは思つて、背中のあれを外して恐る恐る千冬に差し出した。

「その……『服の裏につければあら不思議。とつても涼しく感じちゃうの』あげるから。…………ゆるして？」

「う…………」

ものでつっこむのはわかってる。本当はいけないと思つてる。が、千冬の眼が揺れた。さすがにこの暑さを前に束のそれは欲しかつたらしい。この千冬はわりと欲望に忠実だった。

……暑いのがなくなる？ きっと束の発明だから快適だらうなあ。バスを待つてるととも涼しいだらうなあ。いいなあ。でも物につられる関係の親友つておかしくないか？ でもこいなあ……一回くら

いならやめても……でも一回でも始めると止まらないっていって

と葛藤をする千冬。

「一九二年」

三十秒、返答にかかりつた。束は内心で千冬の葛藤が手に取るよう
にわかるのか、腹筋をひくひくさせながらがんばって耐えた。でき
ることなら声を上げて笑いたかった。『ころころ転げ回るのもいい。
とわいえ、彼女の前でそんなことをするわけにもいかない。彼女は
からかわれるのが嫌いだから。……その理由の大部分は最近束にか
らかわれすぎたのが大部分を占めているのは言わずもがな。ちなみ
に、束も物で成り立つ関係は『遠慮願いたい。もちろんのことながら
千冬がそう答えるとわかつていての行動だったが、それでも思つ
た通りに百面相してくれた千冬はからかうとしても面白い。うんう
ん、と改めて親友のおもしろさを噛み締める。

「まあまあ、ちーちゃん。もともと一つ上げるつもりだつたから、
ね。受け取つて。それと電話は無理だけど、夜にメールするからー。
「ふん。そういうて忘れるんだろ？　お兄さんが絡むと世界最高の
頭脳もかたなしだからな」

まいつたといわんばかりに肩をすくめる千冬。今までの経験上、束はお兄さんが絡むとたんに今までの知性をどこかに投げ捨てる傾向がつよい。何度お兄さんがらみでドタキヤンされたこそか。束もそれを自覚していて、それでも直せないのが一番タチがわるい。

「あはは。否定せしないよ。じゃあなんせ、こくね」

「ああ、夜のメール楽しみにしてる。できるなら料理の写真とレシ

ピも一緒に送ってくれ。最近一夏が料理にはまってな
「やつか。うん！ ちゃんと送つておくよ。じゃあねー。」

かつてのように鼻歌まじりに気分良さげに束は帰り道を歩いていた。今だけは日は長く、夕暮れと水色の空の境界線を眺めながら、両手に買い物袋を抱えている。

一年前にはふらふらと危なっかしかったであろう重さの買い物袋も中学一年生となればそこまで重く感じなかつた。

わへ、もう彼女は中学一年生なのだ。

一年前よりも25センチも身長は伸び、大人と何ら変わるとこりのない高さぐ。体は一次成長の途中ゆえにか丸みが残つていて、将来を期待できるラインが制服越しからでもよくわかる。

特に胸部のそれは同学年と比べるとかなり大きいと言わざるおえない。

ありたいにいつてしまえば、誰もが羨むプロボーションの蛹だつた。

もちろん勘違いして欲しくないが、彼女も何の努力もせずにそうなったわけではない。彼女は自身の輝かしい頭脳をフルに使って多数の器具を開発。豊胸から始まり、体型維持や肌のツヤ、ニキビやシワのできにくい肌の形成、幼少からの顔の骨格の調整などなど。思いつくすべてのことをやつた。その器具の開発のためにかかつた金額は9ケタにのぼる。もしかしたら世界一お金のかかっている美貌なのかもしない。

さて、そこまで彼女が体にかける熱意はいったいなんなのだろうか。

いや、この考えは今更だつたか。

そう、すべては束が彼にきれいだと思われたい一心から始まったのだ。

ある意味でとても健気な少女にしか見えない束だが、そんな彼女が向かっているのは彼の家。自宅には一応携帯でたべてくると連絡をいれてくれる。

そのあたりの流れは篠ノ之家も手馴れたものだ。ちなみに母とのメールはこんな感じ。

泊まつて来る。

From 束

From 母

泊りはダメ。
ちゃんと挨拶するのよ

From 束

わかつた。

From 母

いつもいってるナビ、男のハートをつかむのはいつだって母性ヒギヤップよ。

といつた流れであった。なかなかに良好な家族関係である。

少し前までは束はどこか一線を家族に引いていたが、それはもうない。彼と一緒にいるうちに、なんでか家族と話し合ってみた気持ちになつたからだ。

束は一日かけて家族と話した。自分はおかしい。でもみんなと仲良くしたい。

その顛末はかかる必要はないだろう。一言いこうのならば、今の束に家族関係で不満なことなんて、最近お父さんの絡みがうざつたく感じてきたくらいだろ？ ちゃんとノックするのいいが、ノックしながら入ってきたらノックの意味はないだろ？

…わたしだって年頃の女の子なんだから。

と、そんなことをつらつらと考えていると田的田が田の前に見え

てきた。なにも考えずともここにいる間は毎日通り慣れてしまったことに少しだけ苦笑。まわりを見回せば同じような家がいくつも立ち並んでいるような普通の家。束の家のようこそ和風というわけでもなく、純粋に最近の日本の家という感じだ。

両手に持った買い物袋を片手にもう、ポケットから鍵をだし、開ける。

「おじやましまーすー！」

まだ誰も家に帰つていなこよつだ。ぱりと靴を見て判断すると、束は食材をしまつたために台所へ。すぐに食べ物を使つものとしまつものに分けて仕舞つていく。

それが終わると、台所の水場を見る。どうやら昨日のお皿をまだ片付けていないようだ。とりあえずそれは後に片付けることにして、炊飯器の中身を確認する。だめだ、一合くらいのご飯しかない。

……これは夜食のおじぎうにするとして、炊いてやりますか。

彼も成長期が終わったとはこゝえ、高校三年生。まだまだ食べ盛りで、束の三倍は食べる。こつも自分のご飯をガツガツとみていて気持ちのいいくらいいべる姿を思いで出すと嬉しくなる。

それを終えて焼き終わりとおかずを作る時間を考える。どうやら余裕がありうるなので、先にお皿を片付けることにする。

じつにも彼の母は最近の束に遠慮がなくなってきたらしい。完全に家族の一人として仕事を割り振つて来ることが時折あった。

それはそれでうれしいし、花嫁修行としてばっかりにな束であった。

……お、お嫁さんって、そんな、わたし大胆……っ！

ひとり恥ずかしさにぐねぐねと体は動かす。頬は真っ赤だった。
「ど、いけないいけない。ちゃかちゃか作らないとね」

彼は確か昨日の夜にいつもの時間に帰つてくるといつていった。そろそろ作らないと間に合わないだろ？

束は机の上にだしておいた食材をまな板の方へ寄せて軽く水洗いし、どんどん切つていく。

迷い？ なにそれ。といわんばかりに効率的な動きをしていく束。最初のころに温度の加減と熱の通り具合がわからずに野菜を部分的に焦がしていた姿はもうない。

途中、彼の母からメールで仕事で帰るのが遅れると連絡がきた。めずらしいが、今までもなかつたわけじゃない。最初は一人きりに緊張していたが慣れた。が慣れても好きな人と二人きりだと思うとテンションもあがる。

鼻歌を歌いつつ、フライパンの上の野菜がリズムにあわせて跳ねる。

ちやかちやかと作り完成を田の前にして時計を見ればいつもの時間から十分ほど遅れた時間だった。彼が自分でいった時間までに帰らないなんて珍しいなと思いつつ、さつとお皿に盛り付ける。

…… そうだ、まだ帰らないならお兄さんの好きなおかずでも作るつかな？

と思い立つて、昨日のうちに作つて置いた焼きなすの漬物を取り出して味を整える。

さあ、後はしじうがをナスに載せるだけ。となつたときに玄関のほうからがちやつと音がした。彼の父はこんな早い時間に帰つて来ることは滅多にないので、十中八九彼だらう。

「ただいまー」

やはり。聞き慣れた彼の声が家に響く。束は慌ててご飯をよそつてテーブルにおくと、エプロンにかけたタオルで軽く手を吹きつつ、彼を玄関まで迎えにいった。束は彼を迎えるこの瞬間がわりと好きだ。理由は言わずもがな。

「おかえりー…………？」

が、今田は束が幸せな気分に浸ることにはなかつた。

なぜなら……

「あ、あのー 内田君のクラスメイトの田中真二ですー お、お邪魔しますー。」

とわざわざ自己紹介をしてくれる女の子を彼を連れて帰ってきたからだ。

「え……？」

「なんだ東ちゃんか。緊張しちゃったよ。真面目、この子は近所に住んでる東ちゃん。それで東ちゃん？　このお姉さんは俺の彼女の真面目っていうんだ。仲良くしてくれる？」

彼女……？

呆然とした頭にそれだけが何度も繰り返し、手に持っていたタオルが妙に大きな音でトサつと音をたてて落ちた。

予告……

突然彼女だと紹介された束は混乱し、嫉妬の炎が燃え上がる。
「わたくしがいるのに……っ！」

次回、本気になつた束の暗躍系躊躇劇。

「お兄さん、指一本でも触れたら、殺すから」

自分がお兄さんだと思つて次の「マジン」から選んで貰うこと。どうにかして束のヤンデレ化を回避してしまつ。

「マジン」

あなたはどれを選んでもいい。

1、束の頭を撫でておぐ。

2、食事のあとに彼女を送つてこべ。

3、束の「」飯を褒める。

4、束にいつもありがとうございますとお礼をいふ。

5、みんなの親睦のために仲良くなつたランプ。

さあ、どれを選びますか？

選択次第では地獄をみます。……彼女が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8622v/>

IS~束が異常になったわけ~

2011年11月3日02時03分発行